

仙齋彩歲

仙 齋 彩 歳

2005年1月 テキスト 499号

この四十年、駆け抜けるような日々だった。

毎日の稽古の合間を縫い、次から次へと様々なことを思い立ち、それを計画と云えるほどにまとめ、実現のために走りまわってきた。

中年になってから、いけばなを始めた私を素子はどのように見ていたのだろう。期待、はがゆ歯痒さ、不安。

そんな気持ちの^な紉い交ぜの歳月だったろうが、二人で立てた計画が、何とか完成したときの喜びの大きさが、そこで立ち止まらず、次の計画へと走り出させた。

四十一才と、三十六才で結ばれた二人は、まず暮らしを立てて行かなければならない。稽古場を沢山作るのに走り回って何とか子供達を育て、稽古場を廻るだけでは物足りない。何か二人の想い描いている、いけばなを形に見せたい。

一九七五年にR&M展を思い立った頃から早駆けの毎日になって行った。神経質なくせに気楽な私に、ちゃんとした方角を向かわせるのは、しんどい事だったろう。

そんな歳月だったが、二人の手で十五世仙溪を世に送り出すこともできた。

昨年九月、私は七十七才、喜寿を迎えた。私を成長させてくれた素子の歳月に感謝しながら、今年からはしっかりした歩きで日々を送ろう。

桑原専慶流十四世家元

花 叟

桑 原 仙 齋

※「仙齋彩歳」編集にあたり、桑原専慶流家元発行の月刊誌「テキスト」に掲載された桑原仙齋の文章といけばな写真から抜粋し転載しました。各ページの文と写真の組み合わせは編者によります。

「お正月が来てくれる」

2005年2月 テキスト50号

お正月を迎える準備は暮れの二十九日から始まる。私と娘の櫻子は午前中はお重の材料の買い出し。家に残った者は内外の掃除。花をいけて祝膳を出し……。午後は買い出してきた魚や鴨、野菜の下拵えにかかる。

三十日、三十一日は二人とも一日中台所に籠もりきりでお重の料理にかかる。此頃は少し品数を減らしたが、それでも二十品ぐらいは作る。以前は三十品ぐらい作っていた。除夜の鐘が鳴り終わっても料理は終わらない。

三日もかけて何人分作るのかというと、ただ家族の分だけなのである。暮れの二十八日に一年の稽古を終えると、五日過ぎまでは来客を迎えないことにしている。

あるとき「贅沢ぜいたくなお正月ですね」と云われたが、私にはお正月とはそんなものである。まだ子供の頃、若かった母が女中さんと一緒に湯気の立ちこめた台所で作っていてくれたお正月料理、何か一品出来上がると味見させてくれたが、その味は心に染みついている。

明けて元日の朝、下着まで新しいものを揃えてもらって祝膳につく。

男は朱塗り、女は黒塗り。大福茶を飲むと父が順々にお屠蘇とろすを注いでくれる。

仏壇も神棚もない家だったが、今思い返してみると、宗教的な行事のような気がする。

ものの味が少しわかるようになった大学生の頃は毎年母の料理を手伝っていた。父は配膳台の横に座って楽しそうにつまみ食いしながら盃をあけていたし、幼かった妹は何かさせてもらおうと背のびしながら調理台のそばを離れなかった。

私がかでお重を作るようになると娘達も幼かった妹と同じような興味を示し始めた。

年に一度だけいい。仕事をはなれて家族の家族だけのためのお正月があつてほしい。

年に一度だけいい。お互いに改まった気持ちで挨拶し合いたい。

無宗教で暮らしている私には、お正月だけが祖先を想い、子供達の成長をたしかめ、孫達の幸せを心から祈る日なのである。

娘達が小さな時分、私たちは夫婦で三十一日まで稽古に追われていた。仕方なく、お正月は皆で旅先で迎えた。いいホテルや旅館を選んで出かけて行くのだが、何となく侘びしい。万葉集の

家にあれば 筥けいに盛る飯を草枕
旅にあれば 椎しいの葉に盛る

というほどの侘びしさではなくても、それぞれの祝膳にお重、屠蘇器、煮物の鉢などが並び、孫たちまでかしてまつて「新年おめでとうございます」と挨拶する家での元旦とは大違いである。

別にそう仰々しい料理でなくてもいい。自分が親から伝えられた味を子供達に伝え、それがどんな歴史を辿ってきたかを感じてもらえばいいのである。

伝統芸、或いは家業と云ってもいい。それはただ伝えられてきた技能を教えこむだけのものではない。質素でもいい。ただその技能が生活の美しさによって磨きかけられてゆくものではないかと思っている。

お正月はわたしにとって、家族を、そして家元という一つの家的なものに対する自分自身への驕しほの折り目なのである。

京都新聞十二月二十一日
「現代のことば」より転載



花材／萬年青（宗磧）

花器／燗焼水盤 矢野款一作

2008年1月 テキスト535号

花はそれぞれに美しい色を持っている。だが、いくら美しい花同士でも、とり合わせ、或いは配色によって美しい筈の花が全然美しく見えなくなってしまう。

いけばなは色と形―そこに生氣も入ってくる―で構成されるのだが、色彩感、花型より伝え難い。花型の方は、古い伝書などで伝えられてきているが、その多くは和紙に墨色の木版画である。たとえ彩色されていても、その正確な色調は想像の域にとどまる。

現在いけばなはカラー写真で解説されているが、カラー写真でも、目で見た色が100%正確に写されているかというと、そうでもないことは誰もが知っていると思う。



それでもとり合わせた花の色調は昔よりわかりやすい。

左の頁のチョコレート色のカラー、リユーコリーネ、薔薇、スイートピーにシンビジュームの葉をとり合わせた盛花は、私の好きな色調だが、チョコレート色のカラーはとり合わせる花の色を選ぶのに苦労する花材である。

それと、この頁のカットに使った濃い紫色のストックと黄色の菜の花というとり合わせの配色は、花だからいいものの、着るものの配色としては、きつ過ぎてあまり品のいいものではないだろう。

色彩については、まだまだ書き足りない。機をみて続けたいと思う。



毎年京都駅の新幹線のコンコースで、京の冬の旅・京都名流いけばな展が「寒の内」に始まる。

あまり使われなくなった言葉だが「寒の入り」は一月五日頃の「小寒」から、二十日頃の「大寒」を経て、二月四日頃の「立春」で「寒」が明ける。でもまだ京都の底冷えは続く。そして人出の少ない閑かな季節である。寒の行、寒稽古、そして花も真冬に咲くと、それを寒桜、寒菊、寒牡丹、寒椿と、秋や春の品種と異なった感じで見ている。

私も毎年一月に、京の冬の旅いけばな展に出品しているが、やはり寒の内の京都を強く意識している。

私は冬の京都が好きなのである。中京の町家はだんだん少なくなってきたが、町家住まいはいいものである。閉鎖的で暗い造り。その上に底冷え、という不満はあるかもしれない。でも本当に閑かな京都の良さを深く感じるのは、やはりこの季節である。

町家暮らしの良さを支えているのは、奥の間と中庭だと思う。庭は常緑樹と白川砂、小さな庭には、あまり大きくない石も据えられている。

花木は椿と山茶花ぐらいで、あとは松というのが主構成である。一年中変わら

ない表情だが、初冬になると山茶花が咲きはじめ、一足遅れて椿が開く。京都の町家は冬が花なのである。

そんな暮らしをしていると、京の冬の旅いけばな展にも、昔から守っている京都の冬の暮らしを映し出してみたいくなる。そこでよくいけるのが苔生した寒梅、椿、それに枯芦や枯薄である。

今年は立花形式でそれらの花材をいけてみた。私が暮らしている京都の冬の佇まいなのである。

千二百年前に開かれた古都。平安時代から鎌倉、室町、桃山、江戸と日本最古の都会は、それにふさわしい暮らしを続けてきている。

京の冬の旅、という催しは、市の観光協会が企画している。閑かな冬の京都の風物は、そこに住む人々自身のものである。どこどかと旅の人が見物に押し寄せてほしくはないのだが、せめて京都の入口の新幹線には、それらしいものを飾りたい。

冬の京野菜をたのしみ、庭の椿、そして小雪の舞う三条大橋の上で寒空の北山を眺める京の冬。それが今年の冬、京都駅新幹線のコンコースに出品した私の立花である。



花材／苔梅 寒牡丹 木瓜 椿 松 枯薄 花器／古銅立華瓶

仙齋彩歳

2005年4月 テキスト 502号

『天地の間には元来隙間^{すきま}があり』、これは宋時代の、王観^{おうかん}という人の書いた「揚州芍薬譜^{ようしゅうしやくやくふ}」の一節である。

天地という語は、大自然の営みと云うことだが、それは広大で神秘であり、人の力では隙について操ることはできない。ただ聖人だけがそれを動かすことができる。そしてその働きで人々を教化できるのである。当時まだ中国には現代のような科学者はいなかったようである。

だが、私はこういう物の考え方、受けとり方が好きなのである。続いて王観は、「今日、洛陽の牡丹^{ぼたん}や維楊^{いよう}（楊州・上海と南京の間の都市）の芍薬^{しやくやく}は、もともと天地の気をうけて生じたものであるが、花の大小、色の濃淡は人間が天地の隙間^{すきま}をくぐり抜け、性質を変化させたものである。」ということ

は、天然の植物の表情を多少変化させてみることが出来るかもしれないという悪戯^{いたずら}のような性質の行為ではないだろうかと思う。そこには西欧的な自然科学としての理論や実証性はないが、自然と遊ぶような大らかさがある。それを現代のバイオテクノロジーから見れば、物好きな素人の手探りの手造りのホビーだったと云えるかもしれない。そして宋時代の中国人は人工交配^{いたすけ}ということに念頭^{ねんとう}になかったそうである。（中尾佐助栽培植物の歴史）。又江戸時代の日本の

花卉園芸は、その頃の世界各国の園芸技術から群を抜いて発達していたそうだが、やはり人工交配による変種作りは行われておらず、自然変異種を何世代も気長に育てて、今では考えられないほどの珍種を作り上げていた。

その一例が左端の朝顔図である。名前は「吹上雀牡丹^{ふきあけすずめぼたん}」。青色縞模様で、メンデルの遺伝の法則の発見（一八六六年）以前に法則や理論抜きで、こんな変わった朝顔を作り出して喜んでいたのである。勘と経験だけの名人技の花作りの江戸時代だった。

正に、天地の隙間に手を突っこんで、変わり種を拾い上げてくるようなことである。そう考えると現代科学は天地（自然）の境をこじあけるようなやり方かもしれない。

私の若い頃読んだ内藤湖南という東洋文化史の先生（京大教授）が、確か、清朝末期以前の中国文化を「成熟した文化」と書いておられたが、花卉園芸文化も、宋時代（十世紀～十三世紀）には既に円熟していたのである。

いけばなも、そのような円熟した東洋的な文化を基盤にして、育ってきたのである。



吹上雀牡丹



花材／枝垂柳 椿二種 苔梅

花器／鉄釉筒型花瓶 河合誓徳作

2005年4月 テキスト 502号

中国の花卉園芸の歴史は古い。詩経（紀元前十一世紀～三世紀までの詩集）にもいくつかの花の名前が出てくる。農業も発達していたので、後代の園芸に近いことが行われていたのだろう（日本では縄文時代）。

そして秦漢時代（紀元前三世紀～紀元後三世紀）になると園芸の専門書ができていたらしいが残っていない。秦漢帝国が終わり、六朝時代になると、花卉園芸への関心が高まり嵇含（けいがん）という人の「南方草木状」という園芸書が出ている。

唐時代になると「百花譜」「園庭草木疏」といった本格的な園芸書になってくる。

宋時代は更に花卉の栽培や観賞が興趣の価値を高め、品種の区別や栽培方法が詳しく書かれるようになった。花鳥画に秀でた徽宗皇帝は、城外の艮岳（こんがく）周辺に大規模な園林を造り、多くの花木を集めた。

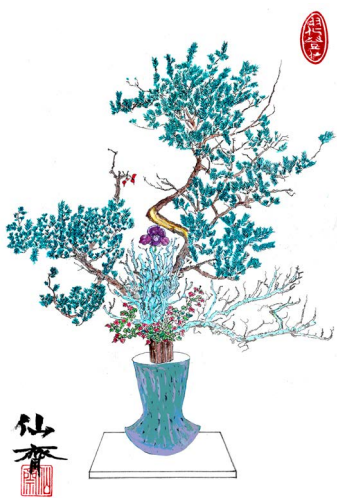
そういう時代背景もあって宋時代には優れた花譜が沢山出ている。

テキスト502号に書いた「揚州芍薬譜」もその一つだが、更に有名なのは、欧陽脩の「洛陽牡丹記」である。

欧陽脩は北宋の高位の政治家で学者でもあった。「洛陽牡丹記」は、まず花の品定めが始まり、花の名前の由来、それぞれの牡丹

丹の特徴、産地を詳述し、次に風俗記として洛陽の人々の花好きの様子を描いた三部に分けられている。山から牡丹の苗を切り出してくる山簍子（さんへいし）。接木（つぎき）の専門家が門簍子（かど）。

そしてやがて日本の園芸が発展する江戸時代が来るのである。



この小品花は「ホッホチャンとケンチャン」に出てくる花のように見えるかもしれない。

だが少し意図はちがうのである。素子は「ホッホチャンとケンチャン」の花は、いつも「いけばなになつてはいけないの。私とケンチャンのある日、ということだけ」と云っていた。

そんなわけで、主題は仮面ライダーと鯉のぼりだったり、手袋、時にはお握り。大事な黒真珠のネックレスも出てくる。

素子はいけながらケンチャンと色んな話をしている。少しは花の名前も覚えたり、植物にも興味をもつようにもなった。

最後になったスパイダーマン。あれから一年が過ぎた。

二人で送った年月。「花ふたり」の序文で素子は、駆け抜けてゆくような日々、と書いていたが、ただこないはいけばな展を試みたい、こんな本を作ってみたい。それが二人の本心からの夢だった。周囲の皆様のお陰で実現することができた。

夢を追いかけるには、体力も気力も要る。

そして今、私の見ている夢は、素子が暗示をかけた夢なのかもしれない。



仙 齋 彩 歳 2005年11月 テキスト 509号

晩秋になると、鬼灯^{ほおずき}の実を覆っていた萼^{がく}は、葉脈だけ残って、中の真赤な実が透けて見えるようになる。

はじめて見たのは、宇治の内海さんの旧宅の庭だったが、何と美しいものだろう、造花の妙とはこんなことなのかと感じ入った。ほおずきは「鬼灯^{ほおずき}」とも「酸漿^{ほおずき}」とも書くが、私は鬼灯と書くのが好きである。

鬼というと角が生えていて、牙をむき出して虎の皮をつけた赤鬼、青鬼を思い浮かべてしまう。

だが大昔、中国で作られた漢字の「鬼」は、死者の霊と云う意味の言葉だそうである。勿論鬼にも善い鬼も悪い鬼もいる。

死者の中でも魂が冥土に行き着けずに、この世とあの世の間でウロウロしているのが幽鬼である。

中国の昔話には幽鬼の話が多い。勿論悪鬼も出てくるが、中には生前の人柄そのままに、文雅な鬼もいるし、教養豊かで心根が優しく美しい女性の幽鬼もいる。

清時代の初め頃、蒲松齡^{ぼしょうれい}という人が、古くからの幽鬼や異類（動植物）と人との交流の話、奇妙で不思議な出来事五百余篇を集めて「聊齋志異^{りょうしあいい}」という十二巻本を書いている。

話に出てくる幽鬼の中には仙女のように美しく賢明で愛情深い鬼がいる。誰もが心を惹かれる幽女なのだが、人前には滅多に姿を

現さない。

そんな幽女が科挙（高級官吏の登用試験）にそなえて勉強中の眉目秀麗な書生に出会う。

お互いに心惹かれて結婚するのだが、書生も幽女と承知している。幽女も自分は鬼ではあるが、お側で貴方にお仕えさせて下さいと心情をこめて云う。そして少し貧乏な書生に代わって家政を切り盛りして家計は豊かになり、書生は勉強にはげむことができて、試験に首席で合格する。

幽女と書生の間には子供もでき、その子も秀才で科挙の試験に合格して、宰相の位まで昇りつめる。

日本の幽霊話に登場する女の幽霊よりずっと高級なのである。詩才もあり、琴も弾き碁も打つ。一緒にお酒を飲むと話も楽しい。

子供の頃からこんな中国の話が好きで今まで読み続けている私なので、鬼灯^{ほおずき}の萼が枯れて、中の真赤な実が透けて見える姿を見たとき、これを美しい幽女が手に提げている灯火^{ともひ}を連想したのである。

他愛^{たあい}もない鬼灯に対する思い入れなのだが、鬼灯に楓の枯れた実をそえてみた。花屋でストックしているうちに枯れてしまったものだが、花器と枯実の茶で鬼灯をひき立てた。



花材／鬼灯の実 楓の種 花器／飴色釉扁壺
2005年11月 テキスト 509号

仙 齋 彩 歳 2006年1月 テキスト 511号

櫻子とはなが、まだ小さい頃、四人でニュー・カレドニア島に行った。
空が澄んでいる。夜砂浜に寝転がっている
と、夜空は巨大な濃紺のお椀を伏せたようで、
星はそのお椀に針で突いたような穴があいて
いて、その外側から誰かが光をあてているよ
うな感じがする。そして、そのお椀の外側は
無限の拡がり。そう思うと、自分の小ささを
つくづくと考えこんでしまう。

そんな気分を素子に話すと「何を云ってん
のよ、隆ちゃん。私は今HAPPYなの。宇
宙と隆ちゃんの大きさをくらべるからいいな
いの」と云われた。素子の云ったことは正し
いのである。

先週妹が姪に言付けて「ちいさなちいさな
王様」という本を贈ってくれた。その王様は
話相手の男の人指し指ぐらいの大きさしか
ないのだが、二人で夜空を見上げながら「君は
遠くの星を眺めていると、自分がちっぽけだ
と思うんだろう。おれはそんな気分にならな
い。自分が巨大になって宇宙と同じくらい
の大きさになっていくのを感じるんだ」と云う。
私達は自分の見たものを心でうけとめるこ
とができるのである。天文学や宇宙論ではな
く、素子が私をたしなめてくれた心を、「ち
いさな、ちいさな王様」が改めて教えてくれ
た。

いい本である。



花材／水仙

花器／陶水盤 伊藤典哲作

仙齋彩歳

2006年2・3月 テキスト 512・513号

初めてのR&M展は、一九七五年の三月八日・九日、新築の京都の朝日会館の柿落（かきふち）として開催した。一九七三年にも大阪の朝日会館で私と素子の主催した桑原専慶流大阪展があったが、これは先代（十三世専溪）にも協力して頂きたいけばな展なので、R&M（隆吉・素子）展とは云えないと思う。私がいけばなを始めて四年目のいけばな展である。

純粹に二人でのいけばな展と云えるのは、このR&M展からである。

中年になってから、いけばなを始めた私には、いけばな展に対する先入観がなかった。それまでのいけばな展というと、ベニヤ板に紙を貼った背景の前に紙貼りの台。

そこに鹿爪（しかづめ）らしく花を飾り、「結構なお作でございます」と云わせるようなものだったように思う。

だが二人のいけばな展をやってみようとなると、花も会場も随分趣の変わったものになってしまう。

先代十三世は絶賛してくれたし、見に来て下さった小原豊雲先生も、「これからのいけばな展は、こうでなくてはいいかな」と仰ってた。

自分達が精魂こめていけた花。それにはそれだけの場を作りたい。二人はそんな想いでいけばな展を開催し続けてきた。今回の三代展（二〇〇五年十二月）でも相棒素子の想いは、私の中で元気に生き続けていた。



花材／枝垂柳 白椿

花器／焼締陶鉢 加藤敏雄作

2007年1月 テキスト 523号

仙 齋 彩 歳

2006年5月 テキスト 515号

久しぶりに、本当に久しぶりで、平安神宮の紅枝垂桜を見てきた。

素子の妹達に誘われてのことだが私一人では、行楽シーズンの名所へは行く気がしない。

西神苑は、周囲が大木の緑で囲われている。その深い緑の中の濃い桜色が京都の春というものを沁々と感じさせ、改めて京都の磨き上げられた自然とはこれだったのだな…、と気付かされる。

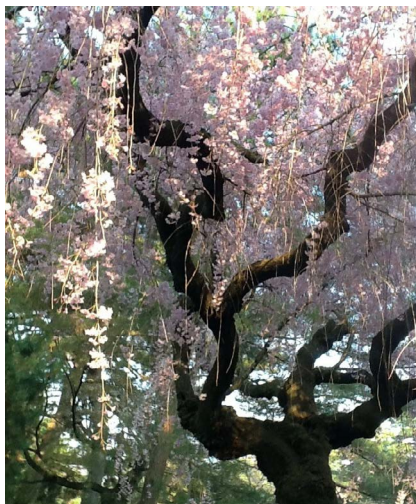
桜の名木は全国各地で今年も咲いている。樹齢何百年という桜の大木が野中に雄々しく立ち上がっている。

その姿は毎年新聞やテレビで知らされる。立派であり神々しい感じさえするが、平安神宮の紅枝垂桜は、京都の造園感覚が、千二百年以上かけて造り上げた庭の桜なのである。何十本も植えられている西神苑の紅枝垂桜は、高さも幅も五メートルくらいだろうか。だから家の庭にも一本欲しいな、という気分で見る事ができる。そこが好きなのである。

いわば、街中の暮らしにとり入れられるような桜だと思う。

平安神宮から、まだ桜が続く。平安神宮を出て動物園の北側を東へ行くと、岡崎のお邸町になる。明治、大正、昭和の初期に建てられた、いいお邸が並んでいる。そこ

にも桜が植わっている。人通りは少ない。もう少し歩くと南禅寺。丁度夕日が山門を照らしている最高の時間帯だった。そして夕食を終えて円山公園の夜桜を見ての半日。誘ってくれた妹達、そして姪にも感謝しておこう。



花材／デルフィニウム・ペラドンナ 胡蝶蘭二種

花器／空色釉星形文花瓶

2005年6月 テキスト 504号

月々の記憶…、テキストや自分の書いた本のお陰で、かなりしつかりと思い起こすことができる。

私の場合、季節に従っていける花が深くかわり合っているので、何時^{いつ}幾日^{いつ}どんな風に暮らしたのか記憶の大きな手がかりになる。

「花^{はな}ころ・味^{あじ}ころ」では、その月の料理の作り方の前に、私の歳時記を書いている。中々いいことを書いているようなので、時々読み返して一人で悦に入っている。

六月の項には、手を動かすことが好きなことをおかしく記している。色んな物を切ったり接いだりして何か形を造るのが面白くなっ

たのは、小学校一年生の頃だったと思う。

その辺にあつた木の切れっ端を使って飛行機らしきものを作ったところ、それを友達のお母さんがはめてくれたのが、きっかけかもしれない。

私は器用な方ではないことをよく知っている。クラスの中には本当に器用な子がいた。平岡という大工さんの子供だった。三年生の時、工作（当時は手工^{しこう}と云った）の時間に、竹ひごでライトプレーン（簡単な模型飛行機）を作らせられたが、平岡君のは私とは桁違

いによく出来ているのである。

物を作るためには、まず手が正確に動いてくれなくてはならない。自分の考えたこと、想い描いたことが手先に正確に伝わるのが器用なのである。

それには天分もあるだろうが、天分よりも訓練が大切なのではないかと思う。

私の家には大変腕のいい大工さんが来てくれていた。ある日「器用やなあ」とほめたら「器用なんと違いませ、仕込まれたんどす。」と答が返ってきた。正確に造ること、それが第一条件らしい。そして、どの木はどこに使うべきなのかも大切な要件として教えこまれたそうである。

正確に造れるようになってからこそ、ざっくりした仕上げも美しく見せることができることも云っていた。

正確に造ること、これは物を造る上での第一要件だが、その上に様々なことが思い描けなければならぬ。

様々な美しさ、心を動かす何物か、それは自然の情景、詩や文学、美術からも音楽からも、私達は色々なものを与え続けられている。その自分に与えられた事の多くを深く心にとめて、更に何を見、どんなことを想い描いているのか考え直してみる時間も必要である。

才能というものは多分訓練の積み重ねの上に成り立つものだと思うし、個性という言葉も大切に思われているが、大抵の場合それは単なる好みに過ぎないのではないだろうか。余分なものを削りとって、最後に残るものが個性だと思っている。



料理の本には教訓的に「心をこめて」という意味のことがよく書かれている。

料理は人にも出すものだから当然心をこめなければならぬ、とは思ふ。だが一体どうすれば心がこもるようになるのだろうか。考えてみるとよくわからない話である。

心のこもった料理とは、ただ誠意だけのものではないのである。経験を大切に記憶して物の使い方をよく身につけ、それを上手に生かすことができるように日々自分を訓練してゆくことから始まると云つていい。

だから「心をこめる」ということは、かなり難しい知的作業なのだが、私達はそれをそんなに意識せずに毎日誠実に暮らしている。

だが時々、心を立ち止まらせて周囲を見まわして、その日の温かさ、街の音、空の色をじっくり眺めてみる、といった何でもないような日々の重なりの中で心

は成長を重ねてゆくものなのである。

心の成長は目に見えるものではなく、色も量も計れない。だが「心をこめて」という必要が起きたとき、誰でもそれに間に合うだけのものは持っているのである。その場に合ったものをひき出せないと、場違いになつてしまう。

心をこめて、という言葉葉を「気持が大切」とだけ考えてしまうと、出来上がりはどんなものになるだろう。「気持」には、何をどう使えばどんな味になるのか、人々は、作られたその品にどんな味を夢見ているのだろうかと思ひめぐらす「知性」も含まれていなければならない。

料理のことを書いているのだが、いけばなでも、私は自分が表現してみようとする、ある自然の一齣^{ひとコマ}は、誰にでも通じるようなものであり、親しみやすく、その場にすんなりと納まることを目指している。宙に浮きたくないのである。



私は近頃、花色のとり合わせを考えるのを以前より楽しんでいる。色主型^{いしゅけい}とも云える。そして花曜会でそれを試してみたりしている。

花曜会の日には、前日の月曜日に入荷した花を狙って花屋に行くのだが、時々こんな花もあったのかと思うような色の花に出合うことがある。そんな花が見つかったら、あとはその花の色をひき立てられるような花を選ぶだけでいい。

花型は、いけはじめている間に自然に出来てゆく。

うまくいった時は大変嬉しい。花曜会では私も花をいけるので、批評はしていない。批評は家元と櫻子の二人が、私の花についても色々と感想を話してくれる。

今日のは少し見当外れのとり合わせだったかな、とか一人よがりだったかもしれないと感じていたときは的確に批評してくれる。人からあまり批評の聞けない私には有難い声なのである。

配色は同系色の濃淡であったり、反対色もよく使う。

花一輪の色によくない色はない。どの花も美しいのである。だがその花にとり合わせる花の色によって、主材の色を駄目にしてしまう。そして配色がよければ花型も何となくすらすらと出来上がってゆくものである。

いけばなの形は絵や文章でわかりやすく説明することができるが、配色を解説するのは大変難しい。テキストのカラー印刷だと、かなり正確にわかっていただけたと思うが、それでも、実際にいけられた花とは何となくちがっている。

その上、例えば二色の花と葉のとり合わせで、主になる花の後ろの方にちよつと他の色の花をのぞかせるだけの場合、美しくひき立つが、その後ろに使った花を前面に持つてくると、全然よくないということもある。

花の色の説明は難しいが、形は基本花型なら真は水盤の直径の何倍、或いはこれぐらいの角度で斜め左前に出すと云えばすぐにわかる。だが色はピンクと云っても白に近い淡色から濃いピンクまで様々な段階がある。その上臘脂色をうすめた青み系のピンクと、オレンジ色がかった朱色をうすめた柔らかな系統のピンクもあって、どちらか選ばないと配色が崩れてしまう。

いけばなでは古くから花型図は発達していたが、その多くは本版の墨色で線形が正確に描かれているだけだった。彩色画もあるにはあったが、色は正確には伝わってこなかったのではないかと思う。カラー印刷が発達してきた現代、花型と共に色も正しく残して行きたいと思っている。



花材／ダリア二種 フィロデンドロン 花器／金鍍金鳥型コンポート

此頃、花曜会で花をいけるのを大変楽しみにしている。

先代（十三世）の頃は批評される側だったが、私が家元になってからは批評役になった。そして今、私の花を家元と副家元が、花曜会の会員と同列に批評してくれている。

二人は私の花をかなりいい方に評価してくれているが、毎回そうとは限らない。

ほめてもらったときは、この線をもう少し伸ばしてみようかな、といい気分になれるが、評価が低いと、その花のとり合わせや花型、そして何故その花器をえらんでしまったのかと、様々な面での反省点が浮かび上がってくる。

そして日頃二人に話している、いけばなの評価基準が、そのまま跳ね返ってくることもある。そんなときは本当に恥ずかしいのである。たとえば優しい云い方でも、私にははつきりと欠点が感じられるのである。

左の頁の投入は、八月の花曜会での私の花なのだが、ピンク・ペッパ^{さんしゅうもどき}の微妙にちがう二色を遣い分けてみたのだが、それが一人よがりではなく二人に認めてもらえたのが嬉しかったのである。ピンク・ペッパ^{さんしゅうもどき}は漆科・山椒擬^{こしやうぼく}属の胡椒木の実。辛い。



花材／ピンク・ペッパ

紫蘭^{しらん}の実 薔薇

花器／黒色釉扁壺

仙 齋 彩 歳 2006年10月 テキスト 520号

私はできるだけ正しく植物の名前を知ろうとしている。

知っていないと、自分の手にした花に失礼のような気がするのである。

この花は、どこが原産地で、どんな環境で、何万年もかかって今のように美しくなったのか。そして我々人間は、どんな名前をつけて親しくしてきたのか。

人間が花に親しみを感じるようになってきて、はじめのうちは簡単な渾名^{あだな}のような名前でもよかったのだから、私達の住む世界が広がってくると自分達のそれまでよく知っていた花とよく似た花が方々に沢山咲いているのを知る。だがどこが違う。

その違いをよく調べるのが植物分類学である。わかりはじめると、この花とあの花は親類らしいとか、先祖をたどってゆくと、やっぱり一族だったと気付く。

そしてこの花は何々家の誰と正式な姓名がつくのである。

作例に使っている穂の垂れ下がった花は、苧科^{ひづ}のアマランサス属の花らしい。紐鶏頭や葉鶏頭の一族である。とり合わせた花はヴァンダ。外国へ行つてVとBを間違えないように呼びたい。深く来歴を探らなくてもいいが礼儀正しく呼びたい。



花材／アマランサスの一種 ヴァンダ

花器／コスタ・ボダガラス花器

毎晩二時頃まで本を読んでいる。本と云っても別に難しいのを読んでいる訳ではない。

子供の頃から好きだった中国の仙人の話。これは小学一年生の時に「西遊記」にとりつかれてから、ずっと続けている。

高学年になると父の蔵書の中から興味のある本を抜き出して読んでいたが、それは父が読むための本ではあったが、私が読めるようになったらと買っておいでくれた本でもあった。大きくて立派な本棚にぎっしり並んでいたもので、読み尽くすことはできないうちに、戦災で全部灰になってしまった。

でも私に最も深い影響を与えてくれた「林語堂^{りんごうたん}」という中国人の書いた「生活の発見」という本は疎開するときの荷物の中に入っていたので、戦後大学へ行くようになってからも時々読み返していた。

中国人とはどんな考えを持つ民族なのか、堅苦しくなく深い所まで描ききった本である。ボロボロになったので、表紙にフラノを貼り、背は赤いチェックの布

にしていた。どこか古本屋に出ていないか、ずっと探し続けていたが、十五年ほど前、梅田の古本屋で見付けた。新品同様に帯まで付いている上に、戦前の本では削除されていた日本に対する悪口も、ちゃんと書かれた戦後版だった。中国思想に興味を持ち、老子や莊子を読むようになったのも、李太白や王維の詩を読むようになったのも、この本を読んだお陰である。

だが仙人の話からも離れられない。

此頃夜中の二時頃まで読んでいるのは主としてそんな本である。中には夢のような美しい話もある。一時半頃になると、睡眠誘導剤をのんで、二時には眠るようにしている。

それでも、睡眠時間は元来短い方なので、朝は七時半から八時に起きて自分の朝食を作りはじめる。一時間ほどかかる悠長な料理である。

来年で八十才になる。これぐらいの事は許されていいのかもしれない。



花材／鶏頭 スモークトゥリー 椰子の枯花梗 花器／茶褐色釉扁壺 森野泰明作

2006年11月 テキスト 521号

まだ夜の明けきれないうちから、庭に冬の小鳥が啼きはじめる。山茶花が咲き、南天の実が綺麗に色付いてきている。

夕方、孫達が時雨の中を元氣よく走って帰ってきて、大きな声の「ただいまーっ」が書齋まで聞こえてくる。いい季節である。

だが、濡れて帰った孫共は着替えさせてやらなければならない。僅かな手間だが厄介ではある。

自然と私達のかかわりとは、そんなものなのである。親しみと厄介さが並存しているのである。

私達は何百万年もの間、自然に大きな恩恵を与えられてきた。と同時に災厄も受け続けてきた。この恩恵と災厄を素直に受けとろうとするとき、壮大な自然の営為に対する敬意が生まれる。

地球上の氷河期が終わって人間が現在のような暮らしをもてる兆しを持ちはじめたのは一万数千年のことである。その頃から初期の農業や牧畜がはじまった。旧石器時代から新石器時代、そして土地を耕し、動物を飼育するうちに、地面を掘って青銅器、次に鉄器を作るようになる。

もともと人間は自然に対して敬意を持っていたのかもしれない。だがそれを、はつきりと自覚するようになったのは新石器時代から青銅器時代へ移ってくるあたりから

ではないだろうか。

多分その敬意の自覚は人間の知性なのではないかと思う。知性に関する定義は様々あるだろう。だが私達は自然の二面を素直に受け入れるようになった。それを知性といってもいいと思う。

私達は自然に対する敬意から花をいけていると云えそうである。もしそうなら、知性は尊重されなければならない。

知性は人間すべてが持っているものである。そして知識の多さ、少なさは、あまり問題ではなさそうである。大切なのは、自然に対する敬意をこめて知識を活用することである。

今の季節、何かにつけて水仙をいけることが多い。私の最も好きな花の一つである。

京都には紅葉が美しく照り始める頃になると、越前岬から初花が送られてくる。能登半島の西側の海岸の傾斜地に育った水仙は、初花の頃、花は咲いても、あまり大きくはない。房総半島南端や長崎の水仙は同じ季節でも、もっとすんなり伸びている。だが京都ではその越前水仙をよく見つめて、その出生状態を基準にいけ方を考えてきた。

十二月には花を葉よりも低くとり、一月には葉と花は同じくらいの高さ、二月には花が高くなる。

葉を組むときも、^{はかま}袴の高さは季節が進む

ごとに上げてゆく。

目の前の自然を知性によつて再構築するのである。

その上、いけばなは他の文化と無縁に育ってきた訳ではない。

花としての松、梅や桜のような花木、菊や杜若などの草花も大昔からの詩や文学、美術にとり上げられている文化である。

櫻の咲く頃の空の色、風の肌触り。紅葉の季節の吸う息、吐く息、周囲に漂う香り。それぞれに微妙に違っているのである。

その素晴らしさを緻密な感受性で心に蓄える。そんな心での蓄積を知性によつて再構築してみようとするのが、いけばなであ

る。

再構築してみたいいけばなが見て下さった人に共感を生むことができれば、いけた人も見た人も幸せなことである。

だが共感を得るためには表現の技術も磨かなければならない。

先にも述べたように、自然は恵みだけを与えてくれるものではない。大きな災厄も押しつけてくるのである。満開の木蓮の太木を見る時の大らかな気持は、いつ大地震で吹き飛んでしまうかわからない。自然はいい所どりをできない。だが自然は私達の生きる場なのである。素直に喜びと哀感をいけてみたいのである。



花材／寿松 水仙

花器／結晶釉水盤 前田保則作

仙 齋 彩 歳

2007年1月 テキスト 523号

昨晚ケンチャンから電話がかかってきた。「オジイチャマ、ちよっと外へ出て！、物干しに上がって！、上がったか？、そしてたら上見て！。お月さん綺麗やろ、今夜は満月やねんで！」それから暫く電話が続いた。

彼の話によると、あと四、五十億年したら太陽は力尽きて爆発してしまうそうである。そのせいで地球もパンクしてしまうらしい。だが「オジイチャマ、まだ心配せんでも！」と云ってくれた。

電話が終わって暫く空を見上げていたが、初冬の夜空には見える星の数が少ない。大気の濁りと、地上の照明が強いせいらしい。

今でも、いちばん心に鮮やかに映る星空は、南太平洋の小島で見上げた黒に近い濃紺の天空である。

南十字星が見られるというので、夜半に素子と砂浜に出かけたのだが「わあ、凄いい！」と云ったきり、二人とも話す言葉も

なく、一時間ぐらい寝ころがって空を見上げていた。

「よかったね！」と手をつないでホテルに戻ったのだが、あんな夜空を見上げるのはいいものである。果てしない宇宙、それにくらべて微小な自分。だけどこんな小さな自分でも、宇宙を意識することもできるのだと心がふくらむ思いがする。

太古の人々は、都会で暮らす私と違って、天空を移動する星を、ずっと身近なものとして眺め、そして自分を見つめ、朝になれば飛ぶ鳥の声を聞き、草原を駆けてゆく鹿の姿、風の感触、花の香りと季節と密着して暮らしていたのである。毎夜動く天体、咲いて実る草木は自分と自然そして宇宙と一体であることを素直に感じとっていたのではないかと思う。共に生きている宇宙なのである。そして身近な人が亡くなっても人としての存在は魂となつて残るという考えは、その辺りから生まれたのではないだろうか。



花材／大王松 ガーベラ スイートピー

花器／純白釉扁壺

「嚴光——富春山——仙溪」

2007年2～3月

テキスト 524～525号

私が家元を継ぐ頃、桑原専慶流の初代が選んだ富春軒という軒号の由来がわからない。当時の文人のことで、だから何か中国の古典に因んだ名前だろうと見当をつけて探しはじめた。

色んな中国の古典を読んでいる間に、「抱朴子」という四世紀頃の本に「富春」という理想郷らしい地名が出てくる。だが具体的にどこなのか、そこでどんな事があったのか書かれていない。勿論普通の漢和辞典にも富春の項はない。そこで図書館なら何か手がかりがつかめるかもしれないと、暇を作って全部で十巻ほどある漢和辞典を調べてようやく、「富春」の項を見付けた。

富春Ⅱ山名。浙江省桐廬縣の西、と出ている。嚴陵山ともよばれているが、それは後漢の嚴子陵（嚴光）の隠栖地である。

嚴光の後漢の光武帝の学友である。漢はご存知

のように、王莽のクーデター（篡奪）によって一時断絶するが、王室の一族の劉秀が王莽を敗死させて光武帝として帝位につき、漢帝国を再興する。そして学友でもあり、親交を結んでいた嚴光を探し求めて宮中に丁重に呼び寄せ、皇帝のブレーンとして政務を補佐して欲しいと頼むが嚴光は辞退して富春山に帰ってしまふ。と後漢書に記されている。

富春というのは嚴光の隠栖した山の名前だったのである。それなら李太白の詩や、他の古典でも読んだことのある人物と風景である。

嚴光という人は、光武帝の親友であつたばかりでなく、人柄も高潔で学識も豊かな人である。

後漢王朝の創始されたのは紀元二五年であるが、常識豊かだった流祖は嚴光の逸話を知っていたと思う。そしておそらく嚴光に崇敬の念を抱いていた



①



②



③



④



⑤



⑥

たからであろう、自らの軒号を富春軒としたのはそういう理由かららしい。そのような雅号は、古典の中から選ぶことが多い。

そして富春山の山間には富春江という大きな川が流れている。写真①は富春江の一部である。二千年前、嚴光の邸宅の前の富春江の岩の上で魚釣りをしたという場所が写真②の嚴子陵釣台として遺されている。

杭州から南西に延びる武夷山脈は千キロほどつながって広東省に至る深い山地である。なだらかな山の間を、ゆったりと流れる富春江、まさに仙人の居そうな仙境である。

自分の軒号を富春軒、花号を専慶から仙溪に変えたのも、そんな想いからだろうと思う。

初代の著した「立花時勢粧」を読むと、かなりの古典的教養を感じる。当時の教養として中国の

古典に通じていた上に、日本の古典文化にも明るかったのが行間に読みとることができる。だが古典に固執せず自らの生きた十七世紀をも愛していたようである。その端的な表れとして、牡丹のいけ様に関して「昔は牡丹は貴重な花材だったので、立花では胴に短く使ったが、今では多量に栽培されるようになったので、私は牡丹一色の立花を挿す」といった大きな牡丹一色の立花図を遺している。

「立花時勢粧」に出てくる作者は医者をはじめ町衆の名ばかりである。初代としては、当時の仕業者に縛られた宮廷人や大寺院や大名家を相手にするより上層町衆に自分の立花を伝え、「都林泉名所図会」にも記録されているように、西本願寺の対面所で一間の立花展を町衆（市民）に公開している。その立花展は京都の年中行事の一つとして人気

高く会期中は連日人出で混み合ったと伝えられている。

現代の私達は初代の立花を創作的、或いは個性的と評しているが、それは初代が好んで身につけた教養、そして興味深く見守った四季の風物、植物の出生（生態）から自然とその作風が生まれた作風だと思う。殊更創作しようと苦心したものでなさそうだと私は思っている。

嚴光・富春山・仙溪という関連を知ってから、随分長い間行つて見て来なかったのではあるが、共産党が強く支配している頃にはどうも出掛ける気にはなれなかった。

毛沢東が政権をとり、文化大革命、紅衛兵が傍若無人に知識階級を吊し上げ、古い仏像や寺院や道観（道教の寺院）を毀す様子を今でもテレビで放映されているが傷ましい光景である。

だが深圳が新産業都市そして驚異的に発展し、香港がイギリスから中国に返還され、上海は昔の黄浦江沿いの租界をそのまま残しながら大きく経済中枢として変貌してきた。

これならもう出掛けても、それほど嫌な目に会



⑦



⑧

うこともなさそうだと富春山行きの計画を立てた。富春山は杭州から南へ七十キロほどの位置にある。

有り難いことに杭州から富春山へ行く道に一昨年、富春山居というリゾートホテルが建った。色んなガイドブックにも載りはじめている。広い敷地の中にはゴルフコースもあり、建物は中国風な良さをとり入れ、部屋も広く設備も整っている。

着いた翌日に富春山に出掛けたのは前文の通りである。

流祖仙溪は富春山に行つてはいないが、嚴光の人柄は後漢書に詳しく記されている。隠栖した富春山、そして釣りをした富春江にも「嚴子陵釣台」として現在まで遺されている。

私としては富春山のことを本で知るだけでなく、実際に見に行きたくなるのは当然なことである。

元時代に黄公望という文人が一二四七年に描いた「富春山居図」という中国の国宝級の山水画がある。今から七百年ほど前の絵だが、その頃から富春山の風景はあまり変わっていないように見える。そしておそらく嚴光が生きていた後漢初期

（二千年前）も殆ど同じような景観だったと思う。

「富春山居図」に描かれた江南の景色は、中国西部の屹立する山水を描いた絵とちがつてもっとおだやかな山々で、流れも悠然として幅広い。

滞在したホテルは「富春山居」と云うが、それは「富春山居図」に因んでつけられた名称で杭州市の郊外の広大な敷地に建てられている。

杭州は一一三八年に南宋の都となった。私が中国史の中で好きなのは春秋戦国時代（紀元前八世紀～紀元前三世紀）と南宋の時代である。

ご存知のように宋が金に攻められて都は揚子江の南、杭州に遷り南宋とよばれている。その時、華北の貴族や文人、富裕な商人達も南へ移る。そこから南宋の文雅な時代が始まる。

江南は豊かな地方である。北の都より気候もおだやかで文人達もののびのびした気分で四季を送った。

写真③は西湖の東岸、湖の向かいの山に沈む夕陽の美しい都である。王宮は東岸の南寄りの山裾に建てられていた。都の特等席である。文人達の文章は流麗になり、詩は典雅で人の情を濃かに写しとっている。現代の中国料理の基本的な味わいの育ったのもこの時代であり「夢梁録」や「武林舊事」を見ると当時の都の年中行事や、街の中で売られている品々、お酒の名前まで書かれている。二、三十年前までは南宋時代の街の佛が残っていたそうだが西湖の夕景は変わっていない。

この時代、文人達だけでなく庶民の間からも多くの美しい物語、不思議な伝承がまとめられてゆく。

求めていた古い中国の農村の佛を残しているという龍門古鎮という所へも富春山の帰りに寄ってみた。おそらく十九世紀（清時代）の街のままなのだろうが、入村料だけで細々と暮らしているような

古村である。

この頁のカットに使ったのは、上海博物館にある四千数百年前の玉製の人形である。考古学の本の写真では見ていたが、実物に出会えたわけである。

私はくたびれて全館まわれなかったが健一郎はお腹が痛いのに見たいものは全部見てきたそうである。そしてこの人形の玉製の小さなレプリカを買っていた。今度の中国旅行で一番大切な買い物だったそうである。

杭州での良渚博物館、浙江省博物館と古代中国遺物を私と一緒に興味深くついでまわってくれたことを感謝している。

写真④⑦は上海近郊の朱家角の放生橋。この橋の袂から生きた魚を川に戻してやる。



写真⑤は上海の豫園にある城隍廟。

写真⑥は中国の元旦（旧暦なので二月初旬）に欠かせない鉢植水仙。

写真⑧は杭州の六和塔の前で。

注・『夢梁録』、『武林舊事』ともに南宋、杭州の市中記。『水滸伝』は宋が背景。『白蛇伝』は杭州が舞台になっている。

「オジイチャマ、花はなんで綺麗な色してんのか知ってるか?」

「色と匂いで虫を集めて、花粉を運ばせるためとちがうの?」

「へえー、そう云うと思ってた。それだけやないの、紫外線から身を守るためにあんな色になるのや。紫外線は皮膚を老化させたり皺の原因になったり、当たり過ぎると癌や白内障がおこるやろ?」

「うんそれは知ってるよ。」

「動物は日をよけて陰に入ったりできるけど花は動かれへんやろ。そこでや、紫外線で発生する有害な活性酸素の害を消すための花の色素がその役をしてんのや。青や赤紫は、エーソット、(本を見ながら)アントシアニン、黄色はカロテン。紫外線に余計に当たったら、それに対抗するのに余分に、その色素を出すから花の色が濃くなるのや。」

私は花の色のことをそこまで知らなかったのである。先日から植物学の本を買って

ほしいとねだっていたが、そんなことを知りたかったらしい。

二人で話していると色々なことを教えてくれる。太陽のこと。中心部のびっくりするほどの高熱、何層にも重なる各層の温度。それから地球と月の関係。いつどのようなわけで三日月になるのか、教えられると私の知識がややふやだったことを思い知ることになる。

国語でも、人の心をどのように思いやるのか、物語としていい話がかかれていた。

私の時代の「修身」の教科書とはまるで違う。読ませてもらって羨ましさを感じるのである。

此頃日本の小学生の学力が低下したように云われているが、教科内容を見るかぎり、人間としてかなり高度な知育であり徳育である。親もそれを知るべきだし、上級学校の入試試験官も子供達が何を習得してきたのかを、もう一度考えるべきである。



花材／ぜんまい二種 胡蝶蘭三種 クッカバラの葉 花器／白色彩三角形陶鉢

2007年5月 テキスト 527号

青紫色の雲の中からフラミンゴが飛び出しているような花である。

別にそんなことを意図していけたわけではない。この配色なら感じのいい投入になるだろうと思っただけのことなのである。

この原稿を書くまでの間、健一郎達と「キリク」というアニメーション映画を見ていた。色遣いがとてもいいのである。舞台はアフリカで登場人物もアフリカ人である。

だから大地は濃い茶色や淡い茶色。人物も褐色なので、そこに出てくる人達の衣裳の色、花や木の葉の色、それに動物の色、それらを美しくまとめるのは容易ではなかっただろうと思う。画面の大部分を占める茶系統を背景に、女性の身にまといつけている布は赤、青、ピンク、緑、紫と、色とりどりなのだが、どれも原色に近い、はつきりした色である。

私の使ったことのない配色なのでびっくりしたのかもしれない。

フランスのアニメなのだが、アメリカとも日本とも色遣いがちがっているように思う。

ただフランスだからいいと云っているのではない。昔カラー映画が主流になり出した頃、日本の評論家がフランスのカラー映画を評して「アメリカのカラー映画より、色が淡くていいですね」とフランスの映画監督に話したところ、その監督は「そうではないのです。アメリカほど予算がないので、あんな色

しか出せないのです」と答えられたそうである。だから頭からブランドを信じこむのは愚かなことだと思う。

日常の生活の中に様々な形で接する色には、民族によつて、或いは個人によつて評価の差はある。それは芸術上で、評価の高い名画の色とは異なった評価の範囲だろうと思う。

私の住居は庭も含めて日本風、或は京都風な建ち方である。だが江戸時代の人々、明治の人達から見れば少し違った感じを受けるだろう。この部屋に、こんな照明器具は合わないとか、卓はこんなのに変えなさい。違和感があるから、という筈である。

だがこの百年の間に、昔なかったものが沢山生活の中に入りこんできている。そして昔のものと、新しいものを何とか使いこなせるようになってきている。

例えば左の頁のアンスリウム、それにこの花器というとり合わせも、私の子供の頃（七十年前）なら、今のこの家にはチグハゲだったかもしれない。でも変わってないようでも変わった現在の私の家の中では別におかしくなくなってきた。

多少の違和感は、自分の生活感覚の中で解消できるのである。慣れではなく。

この投入の後ろには、秋野不矩さんの山百合の軸でも掛けておこう。



花材／アンスリウム 紫陽花

花器／白地黒抽象文扁壺 林平八郎作

「お花の稽古をしている間、無心になれる。それが私にとって大切な時間」と云って毎週稽古に通ってこられる。

六角通から、打ち水した細い石畳の路地を通ってくる間に気持ち整うのだそうである。

門の扉を開けて三十数日。そして二階の稽古場に入る。入るとまず確かめるのはその日のとり合わせ。落ちついた季節のとり合わせだったり、華やかな色鮮やかな日もある。

「あ、これは難しそうだな。」とか「こんな配色好きだな。」と思っているうちに、私のいけ方の説明が始まる。

そこから自分でいけてゆくのだが、いつの間にか無心になっている自分に気付く。そこがいいのである。無心というのは雑念のなくなっている状態なのだろう。

私も花をいけている時は無心というのか、ただ花をいけているだけである。だが手にとった花には何かの感じを受けながら

いけ進んでいる。

無心というのは一体どんな状態なのか。もし頭の中で浮かんでいる感覚を言葉に変えて録音してみたら、多分とりとめもない独言になっているだろう。ひよっとしたら、昔見た西部劇の断片、子供の頃見た母の着物の色の、ぼんやりした印象、祖父の洋服に染み付いた葉巻の匂いまで、意識下に潜んでいるようなことにまで、いけた花に影響をうけているのかもしれない。

自分でも気付いていない心の奥底に隠れた断片が絡み合って一つのいけばなをいけ終えるのだろう。無心になるということは、そんなことであるかもしれない。

花、同じ種類の薔薇でも、一本一本どことなく違う。それが他の花と六本、七本といけてゆくと、いけ上がった感じは大きくちがってくる筈である。自分の良いところが出せるようになるまでが稽古だろうと思う。



花材／カクタス・カゲンベ グロリオサ

花器／白黒彩花瓶

小学校の頃、九月に「尚齒会」という小規模な学芸会の日があった。尚齒とは齒を尚ぶという意味だが、その齒は年会を意味する。年令の令は本来「齡」という字である。九月十五日が何故「敬老の日」なのか知らないが、昔からそんな日があったのだろうか。

此頃、その日になると、私の住んでいる学区の小学生や中学生からのプレゼントが届けられる。

自分達が図工の時間に造った造花に手紙がそえられ、その上お菓子まで添えて下さっている。

頂いた手紙にはできるだけ返事を書くようにしている。お菓子は中京の子供達なので量は少ないが質は中々良い。中京の爺さん婆さんは何でもよく知っているから子供達もいい加減なことはできないらしい。

そんな風に持ち上げられると、私がそれに値する爺さんなのかどうか、少し気になってくるのである。

孫のケンチャンと一緒に暮らすようになって、もうすぐ一年になる。近頃は私の書棚から色々な本をとり出して読んでいる。「わかるの?」と聞くと、「わからない漢字はあるけど、かまわずに読んでゆくと、なんとなく意味がわかる」ということである。

それでいいのかもしれない。私自身、父の書棚から興味のある本を探し出して読んでいたが、健一郎の年代は多分そんな読み方をしていたように思う。

そんなケンチャンを見ると、いいオジイチャマにならなくてはと思う。できれば敬愛されたい。だが良く年をとることは中々難しいことなのである。

若い頃沢山の良い老人に接してきた。私も年をとったらあんなに偉くなれるのだろうと思っていたが、そうなるにはそれなりの生き方が必要なのである。此頃は年をとるのを嫌がる老人ばかりで、齢相応の重みを失いつつあるように思う。



花材／枯アナナス コーヒーカップ（葉） レナンセラ・コッキネア

花器／大型深鉢

下の絵は「清明上河図」という北宋の都開封の街の様子を描いた絵巻物の一部である。

長い絵巻物で縦を三十五呎とすると、長さは十五呎ぐらいになる中国の国宝的な絵であるらしい。

宋時代は商業が飛躍的に発展した時期で、その様子がこの絵でよくわかる。

①の絵は開封の街の中を流れる汴河で、中国各地から貨物や旅客を運んできた船が画中に二十五隻描きこまれている。そのうちの一隻が橋にひっかかって乗組の水夫達が慌てて船を立て直そうとしている。そして橋の上では野次馬が大勢たかって水夫達をからかっている。橋のこちら側は料理屋らしい。文人みたいな人が料理を食べながらお酒を飲んでいる。

②はこの橋から少し下流の橋で、橋の上には店屋が沢山出ている。橋のこちら側では竹で組み上げられた櫓のようなものが立っている所は酒屋である。櫓の下には脚店という看板がかけられている。脚店とは支店という意味である。

絵巻物は開封の郊外の農村から始まって市中の繁華街を通って城門から城内に入っていく。

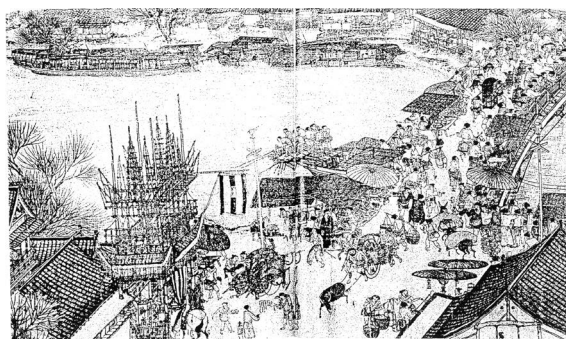
面白いのは馬、牛、驢馬が荷役に使われているだけでなく、シルクロードを通ってやってきた駱駝が背中に一杯荷物のをせられて城門をでてゆくところが描かれている。

まあ賑やかなこと、日本にこんな街が出現するのは、十七世紀の江戸まで待たなければならぬ。

①



②



この絵の中には様々な職業、階級の人の、その日の姿が写されている。服装や持ち物で大体見当がつくが、描きこまれている人の数は七十三人だそうである。

酒屋の前で紐に通した銅銭の束で仕入れた酒の代金を受け渡しする人、二人舁きの輿の中には富裕な女性が乗っている。図中の船の長さは二〇呎ぐらいで米なら二千石も積める船もある。

豊かな経済に支えられ都民の生活は向上し、現代に通じる中華料理はこの時代に食材、調理技術が確立された。

外敵には弱かったが、私の好きな文化が栄えたのが宋時代である。



仙 齋 彩 歳

2007年11月 テキスト 533号

婦人雑誌や週刊誌には様々な娯しみや、癒しというのだろうか。そんな事の案内で頁が埋めつくされているように見える。しかしそこに何々はいくらと値段までのついている。

まるで、自分の内面性が対価を支払えば手に入るような錯覚におちいりそうである。

十一月号には、どこそこのお重（おせち料理という言葉は好きでない）にはどんなものが入っていて何万円とか、どこそのホテルが旅館ではどんなお正月が用意されているとか、その上味わるる気分まで説明してくれている。

お正月とはそんなものだろうか。私について言えば、お正月のお重は母に教えてもらったのである。母は母の母から習って、そこに自分の好みや僕たちの喜びそうなものをつけ加えてくれた。私は私で付け加え、今は櫻子がそれを自分流にアレンジしている。伝統、トラディショナルとはそんなものなのだろう。

いけばなも同じような過程をふんで伝承されてきている。足したり引いたり。足してよくなることもあり、悪くなることもある。引いてしまう方がいいこと、よくないこと。そんな歳月を経て誰もが満足できるものになつてゆく。

現代、多くの人が満たされない想いを抱きながら日々を過ごしている。それはおそらく伝統が仕事によって断ち切られたせいではないかと思う。生活が宙に浮いてしまったのである。



花材／山芍薬の実 杜鵑草

花器／白地黒抽象文扁壺 林平八郎作

2007年11月 テキスト 533号

還暦を迎えた頃だったろうか。八十才になつたらどんな花がいけられるようになるのか、たのしみになっていたのだが、秋にその年令になることはなつても、それらしい何の徴候もあらわれてこない。

その年頃になれば人生について、何程かの達観が得られる筈だと思つていたのに、大当て違いだったようである。

そんな境地に到るためには、それなりの努力や修行が必要だったのを忘れていたのである。

早く八十になつてみたかったのに、なつてみて自分自身、何と愚かで幼い八十才なのかと恥ずかしくなつてしまふ。

人間一人の長い人生の間には、物事の感じとり方は、自覚しないうちに変わつてゆく。

時々、先代（十三世専溪）の若い頃のいけばなから晩年のいけばなを見返している。

戦前先代は稽古に通つてくる人にその日のそれぞれのいけ上がりやを絵に描いて渡していた。墨で輪郭を描き淡彩を施したいけばな図なのだが、その絵が貯まると、一冊の和綴じの本にして上げていた。自分が稽古に通つた何年かの間のいけばなが一冊になつて贈られるのである。そしてそんな和綴じの貴重な本を、時々「これはお家元で

保存しておかれた方がいいのではないでしようか」と持つて来て下さる方がある。

今私の書斎の本棚に十冊ほど並んでいる。

その時代に先代の著作した「生花百事集」という、これも和紙で作つた和綴じの本がある。いい本である。

私は生花をその本で稽古した。基本的な生花の構成、季節感の表現、飾り方。丁寧に解説されているが、あまり細かいことまでうるさく指示していない。

そんな性格の教則本だったので、型の大切さは身に沁みたが、あまり細かい指示が書かれてなかつたので私の生花は型にはまりこまずにすんだようである。

生花は他のいけばなとくらべると、その構成は大変シンプルなものである。それだけに個々の形への感覚、或いは好みはつきり表れてくる。

先代の三十代の「生花百事集」と七十年代に著作した「専溪生花百事」とをくらべてみると、同じ花材を同じ花型にいけていても、いけ上げられたときの表情は、かなり異なっている。見ていると、ひよいとつかえ棒をはずされたような感じをうけるが、「これでもいいのだよ」と云われているようでもある。年令と仲良く一緒に歩んでいたのである。



花材／ハエマンサス（眉刷毛万年青）雪柳紅葉 花器／金縁赤・黄花瓶

初冬になると、よく枯草をいける。好きなのである。

左の頁のは枯れた黍である。枯れたとは云つても、まだ晩秋の日射しと澄んだ夜空の冷気を受けて染め上がった紅葉の名残を留めている。

後にそえた冬の杜若の先枯れした葉の後に咲きかけている花をのぞかせている。花は少し温かい水の湧いているところで咲く。春、夏、秋だと、蕾をいけると翌日には開きはじめるが、今の季節だと三日ぐらいかかる。

こんな花をいけて眺めているのは楽しいというより、宇宙の妙味を垣間見せてもらったような気がする。

ヘミングウェイの「海流の中の島々」という小説の中で、浜辺で流木を焚き火しながら「こんな神々しいものを燃してしまつていいのだろうか」と書いている。

何十年、或いは何百年も年を経てきた木が倒れ、川に流れてゆく間に樹皮がはがれ、ぎざぎざしていた折れ端は石や砂にこすれて丸くなり、海を漂っている間に美しい色相になつてくる。

流木。そして晒木(曝木)にも威厳がある。中部地方の高山帯の針葉樹の二、三十センチ

ある大木の天辺が枯れて風雪に晒され、鈍い銀色になつている部分がある。深く濃緑の樹林から突き出ているが、そんな天辺の立派な大木を見ていると、お辞儀しなければならぬような気分になる。

あんな所で風雪に耐えながら堂々と枝をのばし、緑を蓄えているのである。

日本アルプスに行かなくても、廬山寺の桑原専慶流の石碑の左側に梅の大木がある。二十センチほどの高さだが太い横枝が枯れて雨風に洗われて灰白色になつている。年に何度もお墓まいりに行く度に見上げている。そして欲しいのだが、切らせてもらつたりすると、罰が当たりそうだし、見上げる楽しみもなくなってしまう。

今年もそろそろ京都駅の新幹線コンコースで「京の冬の旅」のいけばな展がはじまる。時々枯芦や枯薄を主材にした花を出品しているが、自分でもうまくいけ上がったなと感じることがある。

いけばなには景色花という型式がある。日本画の画題と似通った面もあるが、私の枯草を主材にしたいけばなも景色花と近いかもしれない。だが、それとは又違った感じになつているようである。北山辺りを散歩しながら何か拾つてこよう。



花材／枯黍 杜若(四季咲種) 椿(紅・白)

花器／黒地白点刻文花瓶 近藤豊作

2008年1月 テキスト 535号

中国の文人達は非常に教養の高い人々だった。四、五才ぐらいから四書五経をきっちりと読みこまされ、更に六芸を仕込まれた。六芸とは士として秀でなければならぬ礼、楽、射、御、書、数である。礼とは人との交際の規律と云つていいと思う。楽は勿論、音楽のこと、射は弓術。御は馬車や騎馬の扱い方、書はいうまでもなく書方。数は算数。

古典籍に通曉し、六芸に秀でた人が科挙（高等文官の採用試験）に合格すれば閣僚や地方長官に任命されるのである。これらの人達は元々裕福だった上に、いくつかの官職を歴任してゆくと更に裕福になる。

そこで気苦労の多い官職は早々と切り上げて自由に暮らすことを望む。そして詩を詠み、琴を奏で、読書に耽る。そんな閑雅な日々から生まれたのが文人画である。

いい絵が描けるのは万巻の書を読みこなしてきたからであり、諸方の名山を逍遙し、その風趣を心の中で、より良く抽象できるようにしたからであると言ふ。万巻の書といっても一頁あたりの字数は大体三五〇字ぐらいなので、一冊四〇頁として一巻は一五、〇〇〇字ぐらいのも

のである。現在出版されている本は一頁が一、〇〇〇字前後で頁数は三〇〇頁ぐらいとすると、字数は三〇〇、〇〇〇字になる。ということは現在の単行本一冊は昔の木版摺の本の二〇冊分にあたる。

一万巻（冊）の書物は現在の活字本の約五〇〇冊分に相当するようである。

五〇〇冊の本というと、一年に十冊読んで五〇年かかるのである。しかも昔の中国文人達の必読書とされていた孔子の「論語」、孟子の「中庸」、或いは儒家以外の「老子」「莊子」等を熟読しようとするのは大変なことである。誇張された巻数だと言うが話半分としても難解な本を毎年五冊づつ五十年間読み続けなければならぬのである。

だがそれくらい読みこめば、自分自身の思想、哲学もしつかりするに違いない。そして読書一万巻によつて堅苦しいばかりの人柄になってしまう訳でもない。それは如実に文人達の絵に表れているのである。

彼等は優れた教養人でありながら友情にも厚く、俠気に富み、音楽を愛し、詩情豊かに暮らしていた。

私には理想的な生活なのだが。



花材／梅の老木 水仙 花器／淡青色釉八角形花瓶

京都新聞は毎週「もくよう版」という八頁のタブロイド版の別冊がくる。その第一面に、絵本作家の永田萌さんが、「花ときどき風」という随筆を書いてらっしゃる。

此頃その文章が好きになっっている。今日は「ふきたんぼぼといっしょに」というお話で「今朝は五つも花が咲いていた」、園芸店にもあまり売っていない花なので毎年見つけたらきまった植木鉢に植えかえて苔を敷きつめて咲くのを待つてらっしゃるらしい。

そうするのが「季節ごとの自分との約束事」なのだそうである。

優しく美しい約束事である。

いけばなにも色々な約束事がある。例えば生花では初冬の水仙を真、副、留の三体で花は葉よりも低くいける。そして季節が進むに従って花は葉よりも高くいけ、雪折葉をまじえて五体、七体。或いは株分け挿などでもいいけるようになる。

これは昔の人、多分江戸時代の誰かが水仙を、初冬から早春への生態の観察を丁寧に見つめ続け、それを十二月、一月、二月

といけ分ける手掛かりにし、初花、中期、盛期と花型で示すようになった。人々は成る程と思うようになって水仙の約束事が認められるようになったのである。

永田萌さんの約束事は自分自身、或いは自分だけの約束事だが、生花での水仙の約束事は、水仙をいけようとすると多くの人々との共通の約束事である。そうしていけられた水仙を見る人は、その花型を見て、もう二月になったのだと気付かせられる。

約束事というのは「きまり」或いは「規則」という感じのする面もある。

だが、そう窮屈に捉えたくない。永田萌さんのように「ふきたんぼぼ」を待つ気持ちの方が大切である。「心待ち」で季節の到来、好きなものに逢えることの楽しみが約束事になってゆくのは美しい暮らしである。

いけばなの約束事、それは古人の見出した優しい花の姿なのである。

約束事はゆるやかに心にしまっておきたい。その約束事が本当にいいものなら、人も大切に見守ってくれるものになるのだと思う。



花材／レナンセラ・コッキネア 薔薇 青麦 花器／結晶釉水盤 前田保則作

2008年3月 テキスト 537号

よく人に「〇月〇日頃京都に行くのですが、どこか本当にいい所を教えて下さい」と尋ねられる。

聞かれても答えようがない。永年京都で暮らしていても、心に深く沁み入る風物に出逢えるのは偶然に過ぎないのである。

例えば「花ふたり」の五月の頁に大田神社の杜若の写真をとっている。丁度満開になった日の夕方である。

その日は昼過ぎから準備にかかっていたのだが、明るい午後の陽ざしをうけて清楚な紫に群がっていた杜若が、夕方になると刻々と紫の色を深めつつ、ついには濃紫色となり夜の闇に沈みこんでゆく。

その一刻を幽玄と見ればいいのか、妖艶と思えばいいのか、歳を経た杜若の不思議を見たのだろう。

古代の北山の麓は深泥池から大田の沢まで湿地帯だったそうで、杜若もその時代からの生き残りらしい。

能楽以前から洛北に咲いていたのである。その杜若が平安京という都市にとりこ

まれて一層都雅な趣を磨いてきた花だと思ふ。

京都御所でもいい時刻に巡り合ったことがある。

秋の夕方、今出川通りの花屋へ行った帰り道、御所の中を通っている時、月が昇りはじめた。偶然満月だったのである。

仙洞御所の上に秋の満月が昇りはじめたのだが、最初はただ月が出てきたか、と思ったに過ぎなかった。見ているうちに、こんな風景には出会ったことがなかったことに気がついた。絵でも見たことがない。詩にもそんな光景の描面はなかったようだ。これも偶然である。

心に深く刻みこまれる京都の景色はいくつかある。

でもそれは、いつ、どこで出逢えるかはわからない。季節、時刻、天候と条件は様々である。そんなことを感じる心が文化を育ててゆくのだらうと思ふ。

いけばなも、何世代もかけて自然を感じとった心のより処なのであらう。



花材／カラー三色

紫陽花

花器／濃紺八角花鉢

仙 齋 彩 歳

2008年5月 テキスト 539号

私は小さい頃から「おかき」が好きだった。幼稚園の頃は東京の祖父の家に居た。時々日本橋の店に連れてもらっていたが、子供の私が退屈するだろう、それに一日中番頭さんにお守りをさせておくわけにもゆかない。祖父は何を思ったのか、番頭さんに寄席へ連れて行かせたのである。

昼席である。番頭さんは多分少し心配そうな顔で、私一人を置いて帰って行った。心付けでも渡しておいてくれたのか、女中さんが塩煎餅とお茶をお盆にのせて持ってきてくれる。多分私がおかきが好きだと云っておいてくれたのだろう。塩煎餅はおかきの一種だが家で食べているのほど上等ではなかったのだが、それでも喜んで食べていた。

おかきならそれでよかったのである。祖父は甘党だったので、お菓子は干涸らびて捨てるほどあったが、私は見向きもしなかったそうである。ただ餠あてがきらいだったにすぎない。チョコレートはこんなおいしいものは他にないと喜んで食べていた。未だに、最上級の和菓子と中程度のアップルパイが並んでいたら、ついアップルパイ

イの方に手が出る。少し大きくなった頃、何故「おかき」が好きなんだろうと、よくよく考えたことがあったが、さっぱり理由がつかめない。反対に嫌いなものは、いくつもの理由をつけて、どうして嫌いなのか説明できる。

だが好きなものは、「ただ好き」としか云いようがない。

人に対する好き嫌いは食べ物より理由がつけにくい。とくに異性に対する好き嫌いはかなり曖昧である。自分はこのいうタイプ（容貌・性格）が好きだと常々云っている、それとはかけはなれた人を好きになることがある。本人に、君が好きだと云っていたタイプと大分違うように思うけど、どうして好きになったのと理由を聞いても「好きになったんだから仕様がなくてしょう」という返事しか返ってこない筈である。

好きになることの根源的な心の仕組みは解明しようがないことらしい。

好きになったのはつかみようがなく、それは縁というより他に思いようがない。だがその御縁は大切にしてこそ値打ちがでてくるのである。



花材／朝顔枯蔓

ガーベラ

紅珊瑚

ミリオクラダス

花器／濃紺釉深鉢

2008年5月 テキスト 539号

仙 齋 彩 歳

2008年6月 テキスト 540号

私は子供の頃から「西遊記」や「水滸伝」が面白くて読みふけていた。上質の翻訳本で、昔の中国の講釈師の口調のような文章だった。

そんなことから中学校（旧制）に入ったら漢文が習える楽しみにしていた。

ところが初めて習ったのが論語の「子曰、マナデトキニコレヲフ マタヨロコバシカラズヤ学而時習之。不亦説乎」である。先生は鬼瓦という渾名あだなの中学校一年生の私達と同じくらいの背丈しかない怖い顔の人だった。

更に朱子の「少年易老、学成難」と追い討ちをかけられた。直ちに退却、西遊記に逆戻り。

随分色んな本に出逢った。「史記」もその一つで中国最初の歴史書である。列伝という巻があり、その中に「遊俠列伝」と「刺客列伝」という章がある。随分面白い話が出てくるが、現代の香港の武俠映画もその流れを汲んでいるようである。

中国の国教は儒教だが、官界にある時は儒を奉じ、官界を去って隠退生活に入ると道教的な生活に入る。

もともと儒と道の二面性を具えていたのだろうが、そういう士人の詩や絵画には道教的な面が滲み出している。それに市井の奇異な話を好んでとり上げ集録したりしている。

蒲松齡ほしょうれいの「聊齋志異」りょうさいし（平凡社刊）は上下

で一一五〇頁、五〇六篇の面白い話がのせられている。

それに類した本を読んでいると、孔子の色々な面が見えてくる。へえーっと思ったのは孔子は大男だったということである。孔子の体格なんか考えたこともなかったが恰幅かつぶのいい大男が筋の通ったことを堂々と論じれば、遊説先の諸侯国の王達は「なるほど、そうでございますな」と答えざるを得なかっただろう。

精神的なゆとりも多分に持ち合わせていたようで、弟子達との会話にはユーモラスな面が見える。

弟子の子路が「鬼神にはどう仕えればいいのですか」と聞いたところ孔子は「鬼神とはどういうものか知らんね」、子路はその上「死」について質問すると「未だ生ということがどういことなのか知らんのに死のことがわかるわけはないね」と答が返った。現代でも呼吸停止、心停止、最近では脳死など医学でさえも死の定義はあやふやである。

もう一つ「在いますが如く祀れ」と言っている。神や祖霊というものがあるのかないのかわからないが、あるものと思って祀れ、と云っている。

私も草木に心があるのかないのか知らないが、あるように思っていることにしている。



花材／花菖蒲

花器／青白磁水盤

2008年6月 テキスト 540号

正面の赤い花は仙翁。色の濃い方は松本仙翁、淡い方が節黒仙翁で、枯葉の間の緑色のは貝母の実である。

貝母は早春に花が咲いて、六、七月頃に実ができるが、実をいけたのは初めてのことである。

左に長くのびしたのは鳴子百合だが、白斑入りの園芸品種より、ずっと大きい。

十年前に出版した田辺聖子さんとの「源氏拾花春秋」の第十六帖「閑屋」に因んでいけた仙翁について、私はこんなことを書いている。

「都を東国に向かつて旅立ち、山科を過ぎると、道は逢坂のゆるい峠道にかかる。

北側は逢坂山、南側は音羽山の高い斜面に挟まれ、椎などの照葉樹の茂る日陰道である。そして峠の近江の国との境に逢坂の関があった。

このあたりには七月から十月にかけて山地の半日陰に節黒仙翁が咲いていて逢坂草ともよばれていた。逢坂の関から坂道を少し下ると漣の琵琶の湖のきらきら光る水面が目の前に広がる。

源氏はこのあたりで空蟬に再会したそうである。

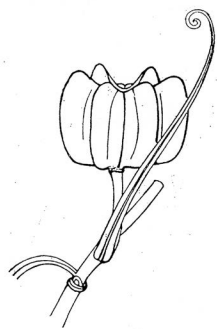
私達の若い頃、よく琵琶湖へヨットに乗りに行った。そしてここまできると、今日はい

風が吹いているかなと湖面のヨットの走り具合を期待しながら見下ろしていた。それは今でも通る度に思い出す私達の逢坂越えである。」

貝母は日本の野草だと思っていたが、葉草として中国から導入した花で編笠百合とも云う。日本古来の貝母は越の小貝母とか蚕小貝母とか、種名の上に「小」がついている。

鳴子百合は本州中部以西に広く分布しているので、京都近辺でも、よく注意していれば出合える野草である。斑入りの切り花品種よりも、かなり大きく、長さは八十センチぐらいになる。更に大きい大鳴子百合の茎は一三〇センチぐらいまで伸び、葉は二十五センチもある。作例に使った鳴子百合は鉢植えだったが八〇センチほどあつて短くいけるのが勿体ないような気のする花だった。

貝母の実をいけたのはいいが写真ではよくわからないと思うので牧野富太郎先生の「増訂草木図説・草部」の貝母の実の絵をそえた。



花材／貝母の実と枯葉 鳴子百合 松本仙翁 節黒仙翁 花器／搔落陶花瓶

字は稽古しなければ、と心がけてはいるのだが、ちつとも良い字が書けるようにならない。やはり普段からきちんと丁寧に書く癖をつけておかなければならないのだろう。

先代（十三世専溪）は稽古が終わった後、一人一人に、その日のいけばなの絵を描いて渡していたそうだ。左の字は、昭和十九年のもので、落葉松と透百合の投入の絵にそえられている。六十作ぐらいたまると和綴じにしてその人に上げていた。



稽古のあとの絵にそえる字なので先代にしてみれば普段の字なのだろうが私には書けそうにない。

私の父はスポーツマンだったが、やはり、一つのポイントから次のポイントへ移る時の確なスピード感のあるいい字だった。

好きだったのは母の字である。上品な流麗さがあって、その上わかりやすかった。従姉妹達は手本にしていたが、そこからはじめても、中々その人の字にはなってゆかないもののようなのである。

私の習字歴は小学校だけである。五、六年生の受持の先生は、宿酔（しゆくかい）の日の午前中、二時間ぐらい習字の自習だった。三十頁ほどの手本帖の一頁から始めて三重丸をもらう

と次の頁に進めるのである。三重丸をもらえるのは一劃（いちくわく）一劃の筆使いが正しくなければならぬ。例えば簡単な「一」の字でも左からの筆の入り方、真ん中辺は軽く力を抜き、右端での筆の留め方も決まっている。偏（へん）と旁（わう）のバランス、中々三重丸はもらえないのである。

だが私の習字歴はそこまで。

次に毛筆で字を書きはじめたのは素子と結婚して、この仕事には毛筆で字を書かなくてはならない事が多くなりそうだと気付いてからのことである。だが例示した先代のような年季の入った字が書けるわけではない。

昔の人の字で感心するのは大福帳の字である。手慣れた筆法で、誰が見てもわかるように書かれている。読むことのできない草書の名筆より、私は好きなのである。

大福帳といえは、十六世紀のオランダの東印度会社から、本国の本店への送り状、送る中国陶器の明細書なのだが、本当に綺麗に手書きされている。それとくらべると、現代の欧米人の手書きの字は全くの金釘流（かなぎょうりゅう）である。所々しか読めないのさえある。欧米の警察小説で警官の報告書だが「お前の報告書は全く読めないから、目の前で話してくれ」と上司に云われる場面がよくある。

私も下手ながら、せめてわかるように、できれば気持ちよく読んでもらえるように書ければと思っている。



花材／枯向日葵

向日葵

ニューサイラン

コロカシア

花器／濃紺釉水盤

平均気温は昔とくらべて上がっている。
だが中秋である。

日の出は遅くなり、入り日は確実に早くなってきた。

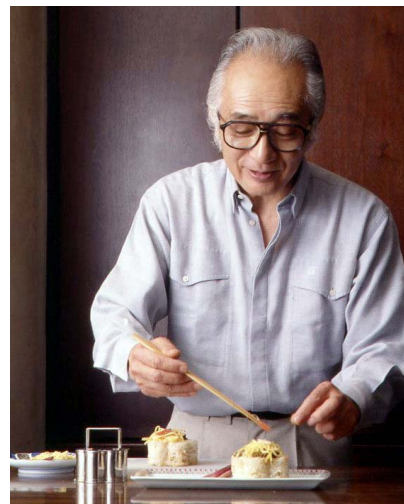
太陽は少し南に寄ってくれたので東西の通りにもビルの日蔭ができてブラブラ歩きの道程も延びてきた。

私のよく歩く御池通、錦小路、寺町通の古本屋、三条通の十字屋（音楽）。そして河原町通のジュンク堂BAL店では大抵七階の歴史書コーナーで一時間ぐらい読みたい本を探す。

本をかかえて通りに出ると、東山も北山も緑が鮮やかに、間近に見える季節である。今日はあと大してしなければならぬ用事はないなと思うと、ついふらふらと出かけてしまう。京都の郊外にはあまり人のこないお寺が沢山ある。そんなお寺の本堂の回廊で本を枕に買ってきた本を読むのはたまらなく心地良い。

たまに住職さんが、「何読んでありますねん？」と声をかけてくることがある。「夢梁録です」と答えると「たしか杭州の昔の様子を書いた本ですな。私も三年ほど前、天台山の帰りに寄りましたが、古い良い町ですな」

住職さんは博識である。秋は日が短い。いい気分で家に帰ると丁度夕食の時間になっている。



花材／山鳥兜 夏櫨 菊 花器／紅褐色釉花瓶

2005年10月 テキスト 508号

仙 齋 彩 歳

2008年11月 テキスト 545号

ジュンノスケに、この姫林檎を「かじつてごらん」といつてみると、へらへら笑うだけで手を出そうとしない。「さくらんぼの大きいのなに」と云つても駄目である。

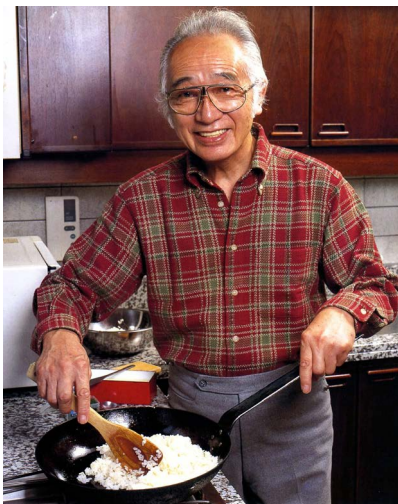
「そんなら、おじいちゃんがたべてみて」と云われたが、私がかじつてみようとはしない。どうやら彼をだまして、どんな味か見させようとしたのがわかってしまったらしい。

この姫林檎の実は、さくらんぼを大きくしたような、水々しくて甘そうに見える。でもやはり食用として栽培されたものではないので、かじつて見ようとは思わない。

こういうのが固定観念なのだろうか。少し意味が違うかもしれないが彼岸花も同じ属のリコリスがもてはやされているのに、墓場に咲く花だとか、根に毒があるとかで、花屋には置かれていない。

とり合わせに穂の紫色の薄^{すすき}を使った。もつと高く葉も見せていけるのが本来のいけ方なのだろうが、穂の出た薄は高く伸びてはいるが、葉の間隔があきすぎて色彩上の効果は出しにくい。

白い秋明菊^{しゅうめいぎく}を薄の穂の間に埋めて全体の色調をととのえた。



花材／姫林檎 秋明菊 薄

花器／灰白色釉水盤

2008年11月 テキスト 545号

還暦を迎えた頃だっただろうか、八十になったら、どんな花がいけられるようになるのだろうか。多分素朴で銜（くは）い気のない花、色々と試行錯誤をくり返してきたが、こんな花でよかったのだ、と自分で気がつくような時期が来るのではないかと期待していた。

昨年で八十才、今年はもう八十一才。一向にその気配は訪れてこない。かえって欠点を目立って感じるようになってきている。こんな筈ではなかったのである。

私がいけばなをはじめたのは中年になってからのことである。先代に習いはじめて、まず云い渡されたのは、「人が十年かかるところを、あなたは三月でやってくれ」。

別に深く考えたり、決意したわけではなく、ただそんなものかな、と思っただけだった。

その時期すでに花をいけるのが、この上なく楽しくなっていたので、先代のそんな言葉も私の上を素通りしてしまったのだろう。

私は先代のいけばなが好きだった。とくに自然調の投入や盛花に惹かれた。まだ素子と結婚していない頃、六角の家で、先代が京展の出品作の下いけをしているところに行き合わせた。沢山の新緑の枝物花材の横に、大きくて奇麗な色の蝶々が置いてある。これいけばなに使うのかなと怪訝な感じがした。

だが実際にどんないけばなになったのかなと、翌日素子に大丸の華道京展の会場に連れ

て行ってもらった。

「これ、昨日父が下いけしていた花」と云われて暫くぼんやりと見上げていた。

その時分、毎週のように京都の北山の奥や北陸の溪流に甘子釣りに行っていた。初夏の谷川、その風景には私なりの深い思い入れがある。

先代の蝶をとり合わせた投入に、その谷川の風の肌触りや音、気温、匂いまで感じてしまったのである。

川端龍子の代表作の一つに「阿修羅の流れ」という絵がある。山奥の大きな岩の間の逆巻くような流れの上を一匹の蝶々が飛んでいる大作。蝶以外は殆ど色を使っていなかったように思う。

私がいけばなをやってみたいと思うようになったのは多分その時からではなかったかと思っている。

色々な好きなことに導かれて八十一才までやってきた。父からは、ものの考え方、母からは美しさ、そして先代からはいけばな、読んだ本では林語堂からは古代中国やギリシャの好感を持てる哲学者の言葉。

頭というのか、心というのか様々なものの導きによって成り立っている私なのだが、たまにでもいい、枯淡さが出せないかと願っているのである。



花材／榛 雪柳紅葉 梅擬 水仙 菊三種 赤芽柳 晒木（杜松の根）

花器／青銅立花瓶

仙齋彩歳

2009年2月 テキスト 548号

新年会の贈り物の色紙に私はよく王維の詩を書いている。

字の上手下手はさしおき（下手にきまつているのだが）、私は王維の詩が好きなのである。

とくに彼の別荘である輞川わんげんの自然を詠った五言詩が好きなのである。それは「輞川集」として二十句、他にも輞川の風物、そして友人との交流を詩にしている。

一番好きなのは「鹿柴」と云う詩である。（鹿柴＝鹿の柵）

空山不見人 空山人を見ず

但聞人語響 但人語の響くを聞く

返景入深林 返景深林に入り

復照青苔上 復た照らす青苔の上

閑まりかえって人けのない山の中、麓の方から人声らしい響きが銜はまのようにぼんやり聞こえてくる。

夕日が深い林にさしこみ、その幽かな光が緑の苔を照らし出している。

閑かな詩である。京都にもこんな感じのする山はあった。

王維の輞川の別荘は随分広がったらしい。多分京都の嵯峨野全体、その周囲の山、広沢の池ぐらゐの池もあったようである。

李太白と同時代の唐の人で、幼時から文

名が高く、晩年には尚書右丞ゆうじやう（皇帝の右腕のような最高位の官僚、宰相）になっている。

王維の詩は閑かで夕陽のように美しい。それと対照的な李太白の詩は「相逢行」である。

相逢紅塵内 相逢う紅塵の内

高揖黄金鞭 高く揖す黄金の鞭

萬戸垂楊裏 万戸垂楊の裏うち

君家阿那邊 君が家は阿那の辺あた

赤い土埃をあげながら馬を走らせる貴公子二人が出逢った。お互いに黄金の鞭を上げて挨拶。枝垂柳の向こうに何万という家々。貴君のお邸はどの辺ですか。

という「相逢行」は「鹿柴」の閑かさにくらべると、随分華やかである。

唐詩選には四六五篇の唐詩がおさめられているが、そのうち五言詩の中で好きなのが「鹿柴」と「相逢行」の二首なのである。

私の想いの中には色んなことがつまっている。いいもの、それほどではないもの、つまらないもの。大きな目の網でふるってみると大したものに残っていない。だがそれらを大切に見つめている間に、少しはいい花がいけられるのではないだろうか。



花材／梅 水仙 枇杷

寿松

玉水木

寒菊

梅苔枝

梅楚

花器／耳付陶花瓶

2008年2月 テキスト 536号

仙齋彩歳 2009年3月 テキスト 549号

数柑子（天鷲絨葉）に苔、散椿。櫻子の文人花である。庭には数柑子もあるし、苔の上に椿も散っている。

花屋でビロード葉の数柑子を見付けたので、あとで庭に植えようと買ってきたらしい。鉢から出して土ごと苔でくるんである。

中国での文人の始祖は唐の王維だとされている。そして文人の描いた絵は北宋時代の蘇軾（蘇東坡）が士人として独特の境地を表現するようになってゆく。

中国では古く随時代に科挙という文官の採用試験が行われてきた。この試験は何段階かに分かれていて、最終試験には、三、四才ぐらいから四書五経、諸子百家の著述、詩文をたたきこまれ、今の日本で云えば、高校生ぐらいになると、何か一つの語句は、どの書物のどの篇に出てくる言葉かスラスラと答えられるようになっていなければならなかったらしい。前述の蘇軾も皇帝自身の行う殿試に弟の蘇轍と一緒に合格した人である。

こんな試験に耐え得るのは並大抵の努力ではないだろう。それは過ぎ去った昔の中国の話だと思っていたが、先日中国人の教育熱を報じるTV番組を見た。なんと三輪タクシー（日本でも戦後、物のない頃、東京に沢山あった輪タク）の運転手の子供を大学に入れようと必死に働いているのである。そして夜は両親が子供の勉強をずっと見ながら注意を与えている。そしてそれが取材対象になった輪タク屋さんだけでなく、仲間の輪タク屋が「おれの娘は〇〇大学の理科に入れようと思っているのだが、お前さんの息子は人柄を考えると××大

学の文科がいいと思う」などと話し合っているのである。輪タク屋さんの収入は日本の労働者より一桁低いようである。

だが昔からの勉強熱心、教育を重んじる気風は最低辺までひろがりながら保ち続けているようである。

日本の隣にそんな大国があるというのは将来未恐ろしいような気がする

文人画、或いは士人画は古典的な教養を骨格にして、気品と人柄で人と通じ合い、敬意を抱かせようという絵が成り立ったのである。

文人達は絵だけではない。いい詩が詠めたり、文章を書かせても理路整然とした美しい文体である。勿論腐敗した高官も多かったようだが、そんな連中の詩文は後世に残らなかった。殿試に合格したような高官には莫大な富が約束されていた。

彼等は詩文、絵画、音楽に長じていただけではなく、食味にも見識を持ち、家屋だけでなく庭にも深い想いを持っていた。京都の禅宗の名園とは趣がちがうが、彼等の求める境地が充分表現されている。

櫻子の文人花から話は逸れたが、教養を考えしてみたのである。



花材／山茱萸 白椿

花器／松樹天目鉢 木村盛康作

青い紫陽花とアンスリウム。このとり合わせは前にもテキストにのせている。

好きなとり合わせの一つである。とり合わせという言葉は色んなものに使われる。辞書には「いくつかのものを組み合わせ、調和のある物を作る。」と説明されている。

何でも組み合わせればいいということではない。花でも、何か一輪いけてみたい場合でも花器はどれにしようか考える。

一輪挿は難しいことは難しいが、何種類かの花をとり合わせる場合、多分主になる花を決めるだろう。そして、それに何をとりに合わせるか考えなければならぬ。そこから配色、花型、自然調なら季節感、その上その花の和洋も合わせたい。配色だけで決まるものではないし、形がととのっていればよいというわけではない。

いけた花からかもし出される雰囲気にくれた人の気持ちが映し出されるのである。一枝、一輪、一枚の葉も丁寧に形を整えなくてはならない。

色と形。私はどちらかと云えば、色調にこだわる方である。そのせいか好きな取り合わせでいけても、あまり良い格好にならないことがある。反対に形にこだわる人のいけばなは、形はよくても、配色に難点が出ることもある。

花には色と形がある。それぞれに美しい。美しくない花はない。だがとり合わせによって、折角選んだ花もあまり美しく見えないようになってしまう。形のない色もないし、色のない形というものも考えられない。色と形を同調させるのが、その人のいけばなの技量なのである。

同じことは身のまわりについても云えることである。高級なブランド品を着たってちつともよく見えないことがある。それは服に着られているのである。本人がしっかりした感覚を培っていれば良い服が一層良く見えるようになる。「馬子^{まご}にも衣裳」という言葉がある。あれは嘘だと思う。すぐれた馬子が、ちゃんとした馬子の装束を身につけていれば、その人柄は人に通じるのである。高級なブランド物が馬子の人柄をひき立てはしない。

花をいけることは難しいのか易しいのか、それはよくわからない。だが私にもたまにいい花がいけられることがある。自分でも良いと思うし見て下さった方も「いいですね」とほめて下さる。そんな花をいけられた時をふり返ってみると、あまり考えすぎではないようである。ごく自然に、素直にとり合わせをえらび、無心にいけているようである。



花材／紫陽花 アンスリウム二種 花器／濃紺八角陶鉢

仙 齋 彩 歳

2009年6月 テキスト 552号

梅雨、誰もが嫌がる季節。だが嫌いな季節のない私には書斎でおだやかに暮らせる一月である。

あの細雨の長々と降り続く六月、雪の日ではないにしても、烏丸通からの騒音も、幾分か静まるし、排気ガスも雨に当たって側溝に流されている筈である。

外からの音が幾分か、かき消されるお陰で、書斎の窓から入りこんでくる物音は、屋根を伝って雨樋に流れ落ちる音だけになってしまふ。

あの音のリズムは中々いいものである。性急でもなく、激しくもない。本を読む、何か文章を書く、思いついた絵を描く気も湧いてくる。

少しの間、雨が降り止むと、賀茂川の流れを見に行きたくなる。いつもより水嵩も増して流れも早い。水音も立てないで流れている時より景気がいい。

二条大橋から南禅寺は近い。ぶらぶらと山門のあたりまで来ると東山は目の前に。雨が上がって薄日がさすと山巒を雲が這い昇ってゆく。何分間か知らないが見飽きない。

閑な人である。

だが人間八十一才にもなれば、そんなことをしている、一向に気がひけないのである。庭の椿の葉も、すっかり生え代わって明るい緑色になっている。雨上がりの日には殺虫剤を撒く。小さな茶毒蛾が落ちてくる。板屋

楓に撒くと、大きな緑色の毛虫がコロコロと落ちる。「ザマ見る！、ここは僕の庭なんだぞ」と心の中で呟く。

私は京都の四季が好きなのである。別にアマゾンの奥に出かけて大自然に触れてみたいとは思わないし、アフリカで野生動物の暮らしに感動してみたい気にもならない。それよりあんな所で十日以上も、訳の分からない料理を想像しただけで「もう結構」と云いたくなる。

京都は私には好都合な広さの都市である。ちよっと歩けば東山か北山、西山に辿りつく。そこには千年以上かけて人間と適度につき合ってくれている自然がある。そして山際の古い神社や仏閣も清潔に手入れされている。南米やアフリカの大自然も結構なものだろう。だが虫除けスプレーは必ず持つて行かないというアドバイスのつく所へは出掛けたくない。エコツアーなどと云っても、現地の人々と一緒に、現地の料理など私には食べられそうにない。一週間も居たら身体の調子が狂うにちがいない。

京都なら、その辺をウロウロとはつつき歩いて帰ってきて、櫻子の作ってくれる夕食が、ちゃんとできているし、風呂から上がれば、自分なりにしつらえたベッドで、虫の心配もなく、のんびり本を読み、好きなCDを聴きながら一日が終えられる。



花材／山荷葉 京鹿の子 白花下野

花器／白色釉花瓶 宇野三吾作

2009年7月 テキスト 553号

仙 齋 彩 歳

2009年7月 テキスト 553号

ケンチャンとジュンケンも、もうすぐ夏休みである。

夏休みを待ち侘びる気持は私の子供の頃とちつとも変わらない。その頃夏休みは八月一日から三十一日まで。一ヶ月間学校へ行かなくともいいのである。

今度の夏休みは何をしよう、どこへ連れて行ってもらえるのか、休み前の七月は、したい事で心が一杯になる月だった。

学校も半ドンだった。午前中で終わるのである。そして一日おきぐらいに水泳の時間があった。魚崎（現在の神戸市東灘区）の浜で泳がせてもらえるのだが、男の子は木綿の六尺褌^{ろくしち}、女の子は思い思いの水着だったが、とにかく勉強させられているよりいいにきまっている。

一学期の終わりは遠泳でしめくくり。遠泳と云つても住吉川の川口から魚崎の浜の東端まで。直線距離にして五百^{メートル}、沖へ少し出るので多分一^きぐらい泳ぐだけなのだが低学年のうちは入れてもらえない。五年生か六年生になると体力のありそうな子だけ参加させてもらえる。一クラス五十人のうち、出してもらえるのは十人以下だった。

先生は和船の上で三人ほど、一人は櫓を漕ぎ、二人は太鼓を叩いて皆のペースをとる。用心のため一緒に泳いでくれている先生が五、六人。途中で泳げなくなった子は先生が船に

引き上げてくれる。

遠泳がすむと、七月三十一日が一期の終了式、通知票と宿題を渡されて、いよいよ夏休み。五日頃から十日間ほど毎年祖父の白浜の別荘で過ごした。

家の番をしていてくれたのは真鍋さんという人だった。素潜りの名人で色んな事を教えてくれた。男前ではないが東郷元帥のような風貌で威厳のある無口な老人だった。

その息子さんと二人で、よく潜り漁につれて行ってもらったが、伊勢海老が、かすかな声で啼くのを聞かせてもらったり、うつぽが岩穴から顔を出しているのも見せてもらった。朝は蛸突きに連れて行ってくれた海底に空になった貝殻が散らばっている。蛸が食べたあとで、その真中辺に蛸が居るのだそうである。真鍋さんは一突きで見事に捉える。

母は真鍋さんと太刀魚の夜釣に出掛けたりしていた。静かに風いだ月夜に太刀魚を釣り上げると、本当に研ぎ澄ました刀のようで、「あんな綺麗な釣りは初めて」と云っていた。僕たちも行きたかったのだが、昼間の疲れで夕食がすむとすぐ寝てしまうので太刀魚釣は経験できなかった。

ケンチャンとジュンケンは、この夏、何を目論んでいるのだろう。中学生になったケンチャンはバスケットボールの練習。ジュンケンは勉強。



花材／赤のまんま 龍膽（白と紫）

花器／燗焼水盤 矢野款一作

2009年9月 テキスト 555号

仙齋彩歳

2009年8月 テキスト
554号

そろそろ、大文字。先月の十七日の祇園祭から一月目である。その一月の間にも京都では色々な年中行事が並んでいる。何しろ千二百年もの間この都市に人が住み続けてきたのだから、お祭りが多くなるのが当たり前だろう。

私の住んでいる骨屋町（六角通烏丸西入）からは浄妙山が出る。平家物語に出てくる宇治川合戦の一場面を人形を組み合わせて演出している。

宇治橋の上を一番乗りしようと駆ける筒井浄妙坊の頭の上を、後ろから走ってきた一來法師が飛び越えて先陣をとる瞬間である。

浄妙山の本体の浄妙坊の人形の芯材は二股になった天然木がそのまま使われている。何時頃その芯材が作られたのか知らないが、江戸時代のものであろう。その芯材に衣裳を着せ、その上に鎧をつけるのだが、室町時代や元禄時代と作られた年代がそろえられている。

私は長い間浄妙さんの着付係をやってきた。そして十七日の山鉾巡行にも加わってきたが、此頃は、家元と健一郎が代わってくれている。



朝、九時に町内を出発し、烏丸通を南下して四条通を東へ、河原町通を北行して御池通を西へ。町内に帰りつくのは午後一時を過ぎる。梅雨明けきらない七月十七日、辛度い四時間の巡行である。

この辛度い四時間、そして六月からはじまる準備を中世から支え続けてきたのが室町界隈の町衆である。

私の次に家元が加わり、健一郎も物心つく頃からこの祇園祭を見つめてきている。それが京都なのである。



花材／太藺

糸百合

花器／十六角型淡青色釉水盤

2011年8月 テキスト
578号

『Fハカセは考えた。赤い薔薇を露草のような鮮やかな青に変身させたい。そのためには露草にあつて、薔薇に存在しない色素合成酵素の遺伝子を薔薇に導入してやる必要がある

——中略——

ハカセは根気よくこの作業を一步一步進めていった。——中略——何年かの後、とうとうFハカセは可憐な薔薇を咲かせることに成功した。

花は鮮やかな青色に輝いていた。

ハカセは気がつかなかったが、その花はどこから見ても露草そのものだった。』

福岡伸一氏の「動的平衡—生命はなぜそこに宿るのか」という本の、二頁「青い薔薇—はしがきにかえて」という章の要約である。

この本で私が一番好きな一節である。

一方、十六世紀の中国の宋では、各地で色んな芍薬を咲かせていた。その時代、王観という人が冒頭に、

『天地（自然）のなす業はすこぶる大であり、また靈妙である。人力などではそれを盗んでのりこえようとしても到底できるものではない。

——中略——もはや人力を加える余地など少しもないと思われているのであるが、決してそうではない。というのは天地には元来すき間があり、天地のなす業にも限界というものがあるからである。』

素朴でのんびりした自然観ではあるが、人々が天地のすき間を手探りで見付け、色んな芍薬を作り出すのであると云っている。

バイオテクノロジーなどという手荒な科学は勿論なかった。でもそんな時代に作られた新種の芍薬は現代まで栽培され続け、私達が初夏からいける芍薬達もその子孫なのである。

時々、中国の奥地で暮らす人々の生活を取材したTVが放映されている。傾斜地の棚田に稲や麦、野菜を作り、文字通り自給自足の生活。重労働の日々だろうが楽しそうに暮らしている。子供達も一生ここで、この生活を続けたいと云っている。

いい生活だと思う。「足るを知る」ということなのだろう。羨ましいような暮らしだと思うが、私にはそんな所で暮らせないことは、よく承知している。

毎日変わり映えもしない食事、年に一度ぐらいやってくるチベットの旅まわりの芝居とお祭り。

十分ほど歩けば色んな映画が見られるし、好きな献立も整えることができる。

そんな現代の暮らしを千年前の人が見たら吃驚仰天するだろう。その千年前の人の日々を、もう千年昔の人が知ったら同じように吃驚仰天するに違いない。今の私達は幸せになったのだろうか。二千年昔の人と同じ不満感と充足感で暮らしている。



花材／紐鶏頭 シンビジューム 不喰芋の葉

花器／黒褐色釉花瓶 竹内真三郎作

知らないことが多すぎる。ということは、知っていることが、ごく僅かだということである。その上知っている、と思っていた事柄でも間違った思いこみであることも随分多い。

だが知っていることが少ないのはつきりわかると、見るもの、聞く音、読む本の行が新鮮な感じで頭の中に入りこんでくる。此頃楽しいのは、そんな時間に出合ったときである。忘れていたことを思い出させてくれる機会、それもいいものである。

人間の脳にも多分記憶の容量というものがあるのではないかと思う。

人は生まれてから何年かの間、新しい脳に言葉や色んな経験が蓄えられ、積み重ねられてゆく。中年までに詰めこまれる知識の量は膨大な量だろう。

そして、中年を過ぎる頃には脳の容量のぎりぎり満杯近くまで記憶は貯まってしまっているのではないかと思う。

容量一杯まで来たら、そのあと入ってくる新しい知識は、古い記憶のうち、それ

ほど大事に思っていないと脳が感じる部分を、多分消し去ってくれて、新しい知識の入る部分を作ってくれているのではないかと思う。丁度おなか一杯になったら、それ以上食べられないのと同じことかもしれない。

健康な脳にはそんな働きがあるのではないかと思う。

だが満杯になった脳には、それまでに貯めこんだ知識や経験を整理し、うまくつなぎ合わせて自分なりの判断や結論を作ることができるようになるらしい。勿論それまでの過程で間違った知識を後生大事にかかえこんでいなければの話だが。忘れることの健康さ、というと、よく物忘れしてしまう今の私の生活態度の居直りのように聞こえるかもしれない。或いはそうかもしれないが、日々新鮮な気分で楽しんで居られるのも、そう考えていられるからではないだろうか。とにかく何を見ても聴いても面白いのは記憶のかけらが何とかうまくかみ合って動いてるかららしい。



花材／カラー ジャングルブッシュ クルクマ 花器／緑釉陶鉢

2009年11月 テキスト 557号

三十年以上前のことだが、大阪で私達のグループ展で、^{きささげ}楸と鶏頭の大型の花をいけたことがあった。テーマはたしか「文人清趣」だったと思う。そのテーマに関する顧問役としてデイヴィッド・キッドというアメリカ人が居た。彼は戦前の中国で暮らし、中国の文物（文化）を大変愛していて、中国の文人についても広い知見を持っていた。

その彼が、私の楸と鶏頭の大きないけばなを見て「これは、まさにニューオーリンズ」と云った。

何故このいけばながニューオーリンズ風なのか。しばらくたってから楸のことを調べているうちに、楸は二億五千年ほど昔、地球上はゴンドワナ大陸という一つの超大型大陸だったのが、ユーラシア、アフリカ、アメリカ、オーストラリアなどの大陸に分裂した頃の樹木で、分裂に

よって中国とアメリカ東部に隔離して分布することになった植物なのだそうです。

植物に限らず、動物も二億五千年もの昔、大陸の分裂以来、大洋をへだてて分かれ分かれに暮らすようになった種族は随分多いのだそうである。キッド氏がニューオーリンズを想い出した楸というのもアメリカ東南部にも中国にも自生している木だからなのだろう。

日本には楸の自生種はなく現在日本に植えられている楸は八世紀頃に中国から持ち帰られた楸の子孫である。私達は洋花と和花という区別を立てている。古くから親しみをこめて和花と思っている植物でも外来種もかなり多いのである。

和花、洋花という区別も、日本人との生活の歴史の長い、短いかの区別でしかなさそうである。



花材／^{きささげ}楸 鶏頭 ミリオクラダス 花器／白黒釉花瓶

2009年11月 テキスト 557号

仙 齋 彩 歳 2010年3月 テキスト 561号

私が六角通の家で暮らし始めて今年の夏で丁度三十年になる。
いい家なのだが、かなり傷んでいた。好きな家なので、いい加減なことはしたくない。

まず最初は路地の石畳。竹中慶敏先生がやって下さった。いい出来栄で、その後お願いした大工さん達も「いい仕事」とほめてくれていた。

それで弾みがついて、あとはうまくいった。といっても全部直すのに十年かかった。期間をきめて一ときにすませてしまうよりも、十年かけた方が良かったようである。

路地の次は台所、それからトイレ、風呂場。少し考える間をおいて進めて行くうちに大工さん達ともよく知り合えて、私がどんな風な仕上がりを望んでいるのか、大工さんのしたいと思っているのがどんな仕事なのかもわかるようになった。工費のことも考えなければならぬが、それは素子と二人が一所懸命働けば済むことだった。

お陰様で居心地よく暮らしているが、もう十年もすれば、方々手を入れなくてはならない所も出てくるだろう。だがそれはもう私の知ったことではない。

作例は少し時季遅れのとり合わせの花だが、昔住んでいた家の日当たりの悪い裏庭の今頃を思い出しながらいけた盛花である。



花材／木瓜 水仙 お多福南天 花器／黒釉陶水盤

「どんなこと考えながら花をいけるの？」

「完成させること！」

これはアメリカからケンチャンの中学校に交流にやってきた中学生に生花をいけて見せたときの質問とケンチャンの返事である。

この答えは質問に対する的を射た答えであつたかどうかは知らない。

だが私にはいい答えのように思える。実際に花をいけはじめたら、それは完成させなければならぬのは当たり前のことである。

その彼が花をいけている、その時にはその前の時空があり、いけ終わったらその次の時空が控えている。今迄に見たこと、聞いたこと、読んだもの。中には深く心に沁みこんでいることや、それほど感じていなかったこと、様々なものが心として自分の中に積み重なっている。

花をいけはじめの前からそんな雑多なものを背負っているのである。そしていける前には、いける花を選ばなくては成らない。だから、その花がどんな花なのか、いつの季節にどんな場所で咲くのか、形をつける上で折れやすい花なら、そっと曲げなければならぬし、水を下げやすい花は手早くいけたい。

だが、いけはじめたら無心になってしまふ。時々、これはちよつとおかしいなと考えて手直しし、又無心に帰ってゆく。

どんな風にいけようかとか考えるのはいいはじめの前と、いけ終わってから暫くしてからのことである。

いけ終わった直後は、ああいけ上げた、完成したと感ずるが、その一作を部屋に飾って見つめ直すと欠点が目につきはじめる。

一作いけ終わったらすぐに自分の完成度は、良くて80点であることを知る。完成度とは馬の鼻先にぶら下げられた人参のようなものである。

だが人参につられて馬は確実に前進しているのである。いつか、何かの拍子に人参をすこしだけ噛^かまれるかもしれない。

考えてみれば、私達は一作いけ終えるたびに、腕より先に理想の方が先に進んでしまふのである。

いくら完全な完成を求めても、その完成は馬の鼻先の人参なのである。それでも鼻先の人参にかぶりつこうとする心が大切なのである。

人間とはそういう心を持つ生き物だと思ふ。

だからケンチャンも、これから先完成という人参を追いかけてほしい。



赤いレナンセラと真白なライラック。はじめから、このとり合わせでどんな形にしようかと考えて花屋に行くわけではない。花屋の店の中を見まわして、このとり合わせなら私の心の奥底にひそんでいる「好み」という感覚をひき出せそうだなと思つた花を持って帰ってくる。

そしていけはじめたら雑念はいつの間にかどこかへ飛んで行つてしまつてゐる。まして創作意欲というか作品を作ろうという気持はない。ただ手にした花が心の奥底にある感覚に従つていけ上げられて行くことだけでしかない。

多分そんなとき、無心になつてゐるのだろう。心の奥底にある感覚はそんな状態にならないと出てこない。

今迄に得た知識などはあまり関係はない。まして人がどう思つてくれるかはどうでもいいのである。

ただ花も生きものである。私が切りとつていけさせてもらつてゐるのは忘れたくない。

だから「お花さん、どうかよろしくお願いします」といけはじめる前に心の中でつぶやく。いけ終わったら「有難うございました」となる。



素溪(ケンチャン)の華道京展への出品は、今年で六回目である。

初出品は、櫻さんがパリで買ってきた綺麗な四本の蠟燭立てを使ってオンシジュームとチョコレートコスモス。(二〇〇五年)。

次の年はケンチャンの工作花。

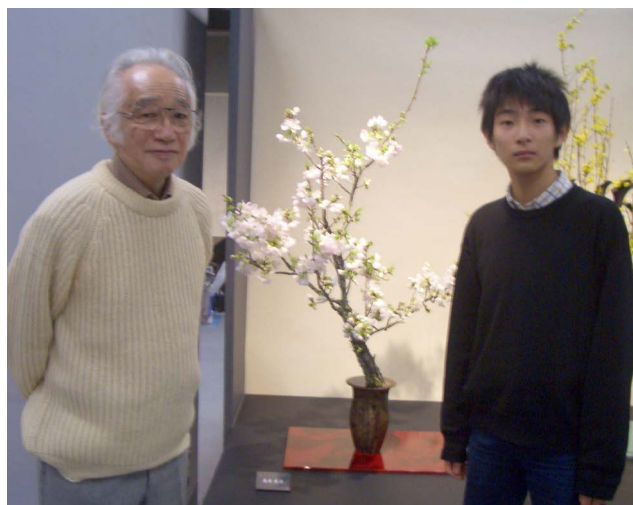
そのあとはずっと木瓜の生花^{せいけ}を出品し続けている。木瓜を出品し続けている間にだんだん良い木瓜を欲しがらようになってきた。

最初に木瓜^{ぼけ}の生花を出品したとき、会場内の木瓜を見てまわっていた。そしていてみたい木瓜の姿を想い描けるようになってきたらしい。

木瓜をよく出品しておられるのは都末生流家元の大津先生である。だから毎年いけこみ中に大津先生の木瓜を見に行っている。今年もいけこみにつき合ってたが、自分の生花をいけ終わったら「おじいちゃん、大津先生の花、見に行こう」という。

二人で拝見したあと大津先生に「僕のも見に来て」。

御自分の木瓜をいけ終わって大津先生がケンチャンの花を見に来て下さった。そして「これやったら中々いいやない」と云って下さったのが大変嬉しかったらしい。段々注文がうるさくなっているが、その注文は自分自身に向けて欲しい。



仙 齋 彩 歳 2010年7月 テキスト 565号

物心つく頃を感じとった好きな味というものは一生ついてまわるらしい。此の頃とくにそれを感じるようになった。

私の生まれたのは昭和二年（一九二七年）所謂昭和二十時代である。いい時代だと云われているが、確かにそうだった。

一家に例えれば明治維新の時代を家興した初代とするなら明治末期から大正時代前半の中間層が二代目。それを受け継ぐ昭和初期を動かしたのが三代目。

よく三代目が家を潰すと云うが、案の定、三代目が日本を敗戦へと導いた。私は明治維新をなしとげた明治初期の人は偉いと思うが、昭和に入ってから三代目（明治生まれ）の政治家や官僚、実業家、軍人は初代が立ち上げ、二代目が守った家産を食い潰した人達だと思っている。

よく明治人は偉かったと世間では云うが、それは明治初期に日本を近代に導いた人達であって明治生まれの人全体を云うのではないと思う。

軍人で偉かったのは東郷元帥ぐらいまでであり、昭和に入ってから三代目支配者層は凡庸であった上に傲慢だった。そして戦後東京裁判で戦争犯罪者として処刑されてしまった、と云っていいようである。

だが昭和初期とは初代の明治国家を作り上げたお祖父ちゃんの財産をすっからかに食い潰す人達が日本をリードしていたのである。

食い潰してしまう時代というものは、まあ気楽な日々である。

私はそんな時代に生まれて育ったのである。

おいしいものは家でも外でも食べられたし味覚もその頃に育った。すべてが本格的に作られていたのである。今よく雑誌などの見出しに使われている「ほんもの」より格が上だったのである。

家を建てるにしても当主が木材の良否をわきまえていたし、大工の腕前も見きわめて指図できた。

そんな時代をよく「古きよき時代」とひっくりめて表現されるが、東北地方が飢饉が襲って娘を売らなければならなくなった話もよく聞いた。

私は多分中の上ぐらいの家だったのだろう。小学校（公立）の昼食前には廊下に熱々のお弁当を届けに来る女中さんが何人か立っていた。だが昼食に帰っても、ろくに食べ物も与えてもらえない子もいた。私は幸い良い時代を送らせてもらったが、暗い面も共有した昭和初期だったのである。

昭和初期のいい時代は中国への出兵から第二次世界大戦に移行して、何とも云いようのない苦しい生活から敗戦。そして飢餓列島。ようやく復興して飽食の時代から美食の時代、そして肥満を警戒する食事の日々になった。変わったものである。



花材／アンズリウム モンステラ

花器／ザリガニ絵付陶鉢

フラフラと散歩に出かけるのは大体午後になる。

祇園祭のすんだ七月下旬から八月の京都は暑い。何もそんな暑い街筋に歩きに出なくてもいいのだが、家でじっとしていると落ち着かないのである。家を出て御池通を東へ、そこから河原町通を南に下がる。稽古日は三条通の手前の花政に花を選びに行く。先代の店主は私と同じ昭和二年生まれなので、いい話相手である。私が行くと店の人が「お母ちゃん、先生来はったえ！」と呼んでくれる。他愛もない四方山話で一時間ぐらいすぐたってしまう。僕の話が面白いのだろうか。

そこから三条通の十字屋でCDを探す。次は河原町通のBALのジュンク堂の七階。中国史関係のまだ読んでない本が出ていないか見に行く。時々以前に買った本を忘れて二度買いしてしまうことがある。誰にだったか、そんな話をする、「私も時々そんなことをしてしまう」ということである。僕だけが間抜けではないらしい。以前は丸善があったのだがなくなって困っていたのだが、ジュンク堂ができた。僕の読みたい本は丸善よりよく揃っている。三、四冊書棚から引き出してエレベーター横のベンチで内容を調べる。

三時頃になって少しお腹が減ると近くで

ざるそば
箸蕎麦。

次は高島屋に行くが、地下でケンチャンと僕の朝食用のベーコンとソーセージを大量に買う。二人で行った時にはケンチャンが荷物を持つてくれる。僕には持たせない。少し前までは玩具売場で長い間待たされたが、近頃は玩具売場には関心がないらしい。

反対に烏丸通を下がって大丸に寄って、河原町を北に上がって帰ってくる日もあるが、真夏はアーケードのある通りを選ぶ。ここまで書いてはみたが、他愛もない僕の夏の午後の一齣。



花材／パフィオペディルム 胡蝶蘭 木苺 花器／コスタ・ボダ ガラス器

2011年11月 テキスト 581号

私をはじめて読んだ「三国志」は吉川英治の三国志だった。

曹操、劉備、孫権の三将の闘争の話だが登場人物が多く誰が誰の味方か敵か途中でわからなくなる程人間関係が複雑に絡み合っている。

その後色んな人の翻訳した三国志を読んだが、どの本でも決まって曹操が悪役で劉備が人徳者、孫権はまあまあの君主。

いわゆる三国志は明時代初期の羅貫中という人が民間の伝承をもとにして描いた稗史小説である。そして羅貫中の作る筋書きに合わせた人物像を設定している。或いは民間が勝手に想像した話をもとにしているようである。

何しろ三国時代から千年も経ってから作られた小説であり、中国芝居の脚本のようなものなので、千年もの間、民話のように語り継がれてきた話を変えられなかったのだろう。曹操を徳の高い武将、劉備を狡い軍閥としたのでは誰も読んでくれる人はなかっただろう。

私をはじめて読んだ吉川英治の三国志で、どうも劉備が好きになれなかったのだが、中国の歴史書を読むと曹操は当時傑出した將軍だったらしい。その上知識人とし

ての著作もあり、漢末の建安文学を代表する詩人でもあった。

漢詩もその頃から新風が起こり、李太白や王維のような心情を率直に詠みこむ唐詩につながってゆく。

中国映画の「レッドクリフ」は赤壁の戦いの映画だが、その中で「曹操軍は八十万」と孫権と劉備が本当にそうなのだろうかとか考えこんでいたが、当時の三将が支配していた州の総人口は五百万人ぐらい。その前の漢の隆盛な時代の六千万近い人口が続く戦乱のために十分の一に減っていたそうである。そして曹操の支配する魏の人口は二百五十万ぐらいでしかなかったと考えられている。従って劉備と孫権の兵員も伝えられている人数よりずっと少なく、赤壁の戦いも映画のような大がかりなものではなかったらしい。

魏のあとをうけた晋の陳寿が魏志、蜀志、呉志という三国の正史を書いているが、これが正式な「三国志」で、小説としての三国の物語は「三国演義」とよばれている。

長々といけばなに関係のない話を続けてしまったが、私には中国史が面白くてたまらないのである。ひよっとすると、私のいけばなにも影響しているかもしれない。



花材／カラー二色 胡蝶蘭 ニューサイラン

花器／方形陶水盤

私は未だに原稿用紙に一字ずつ手書きで一冊ずつ埋めていつている。一昔前のワープロにも無縁だったしパソコンにも用はない。

パソコンのキーを打つより手書きの原稿の方が好きなのかもしれない。但し、毛筆やペンではなく鉛筆で書いている。鉛筆は何しろ小学校に入る前からの使い慣れた筆記具なのである。八十年も使い続けていれば愛着も湧く。小学校から書き取りの試験、その他の答案もすべて鉛筆だった。唯一習字だけは毛筆だった。習字の時間には最初、硯に水をついで墨を磨る。濃淡は自分で調節しなければならぬ。だが十分ほど墨を磨っている間に習字の心構えができてくる。

でもいい字が書けるとは限らない。折角磨った墨である。いい加減な書き方はしたくない。

だが習字の時間で書いたほど鉛筆書きの答案やノートの字はちゃんとしていない。母に「この答案の字はまともに読めないほどひどい字ね」と云われた。その夏休みに大きき二枚角ほどの字を楷書で書く練習を試してみた。やってわかったことは自分の字がどれほどひどかったかと思い知ったこと

である。それまでに書いていた字の二割ほどは自分でも読み返せないのである。字を稽古する方がパソコンの分厚い手引書を相当な時間をかけて読んで使い方を覚えるよりずっと気分がいい。そんな手引書を読んでいる本を読み返す方がよさそうである。

言葉、或いは字を探すのに未だに漢和辞典や大辞林はすぐ手の届く所に並んでいるし、植物辞典も一緒の本棚に並べている。

辞書をひくのは楽しい。間違った頁を開いても、その頁には今まで知らなかったこと、或いは間違つて覚えこんでいたことを訂正することもできる。勿論パソコンでもできることだろうが、例えば左の頁に使った蜀黍でも植物辞典で調べると稲科の蜀黍に似た色々な植物に出合える。間違えた頁を開いてしまうのが、かえって楽しいことがある。いい植物辞典だと原産地での生育状態の写真、近縁種の解説や差違もよくわかるように記されている。

自分の知識をパソコンにインプットするか本棚に並べておくかの違いではないと云えば成る程そうに違いない。手書きしかないのは私の性分なのだろう。苦にならない。



花材／蜀黍 鶏頭

花器／単淡褐色水盤

書齋で本を読んだり、物を書いたりしているときは、大抵あまり騒々しくないジャズピアノを聞いている。くたびれていても明るい気分で楽しく読んだり書いたりできるのである。聴く曲は一九三〇年代から五〇年代に作曲されたのが多い。

子供の頃から聴き慣れたメロディーなので様々な想い出がよみがえってくる。ほろ酔い加減の父が母と一緒に踊ろう、母も楽しそうな顔でつき合う。そのうち弟や妹も私も加わって、おそくまで一家大浮かれ。

クラシック音楽のレコードも沢山レコード入れにつまっていたが、楽しく聞いたのは、アメリカのジャズや、アルゼンチンのタンゴだった。

だが戦争がはじまってアメリカのジャズは御法度になった。それでも母は私が学校から帰ってくると音量を絞ってジャズを聞いて楽しそうに本を読んでいた。

その頃ジャズはオーケストラ・ジャズの全盛期だった。そして作曲家も多彩だったし演奏も優しく甘かった。そして今でもアレンジされ続けていい演奏が聴ける。

今よくかけているCDは、ピアノ、ベース、ドラムのトリオの曲である。あまり騒がしくなくて軽やかで明るい方がいい。そしてヴォーカルの入らない方がいい。人の唱う声が入ると、どうしてもその歌詞の内容を聞きとろうとして読むこと書くことに集中できなくなってしまうのである。

いいクラシック音楽は敬遠してゐるわけではないが、聴き入ってしまうと頭の働きが、そっちの方に行ってしまうので読んだり書いたりする方に集中できなくなる。何かしながら聞き流せないのが重厚なクラシック音楽だと思っている。

今聴いているCDもいい音が出ている。今日の午後ケンチャンの選んでくれたCDプレーヤーである。彼の云うには、「此頃のプレーヤーは低音を重視してるから、おじいちゃんの好きなピアノの音、あまりいい音に聞こえへんから、よく調べてから買いなさいよ。」と注意してくれた。

いい孫、というより良き友なのかもしれない。先でどんな音楽が好きになるのかは分からない。だが私の好きな曲を自分のアイポッドに入れているから安心してゐる。



花材／ガーベラ 紐鶏頭 アロカシア

花器／灰青色釉コンポート

仙齋彩歳 2010年12月 テキスト 570号

晩秋から初冬、淀川の河原は丈の高い枯草におおわれている。一見侘びしい風景だが、その枯草の草原の中に入ってみると中々居心地が良さそうである。

寝ころんでみると、乾いた草の枯葉がつもっていて周囲は背の高い枯草で向こうが見えない。上は青空。風は草の穂の上を吹き通って暖かい陽射し。ちつとも寒くない。持ってきたウイスキーを含みながら本を読んでいると、ここは天国より良い所ではないのかと感じる。

川の流れと風が草の葉を摺り合わせる音。その音もウイスキーの酔いが少しまわり、読める本の面白い頁にくると自分の心以外何にも感じなくなってしまう。そして読んでいる本のことも忘れ、心はその場の雰囲気^{ふんいき}に溶けこんでしまっている。

多分至福のひと刻なのだろう。

枯草が好きなのも、そんな枯草と出逢えたからなのだろう。

この立花の正真、杜若のあたりに私が寝転がっているのかもしれない。

私は花をいける時、あまりむつかしいことを考えない。自分の想いを組み上げているだけのことである。

あまり上手な立花とは思っていない。ただ自分の心の中で思い返して良かったものにもう一度という気持ちで花をいけている。



花材／枯草 枯蒲 枯蓮 杜若 菊（金盃） 寒菊

花器／陶花器 森野泰明作

柔らかくて暖かそうなピンクの雲から赤いアンスリウムが半顔をのぞかせている。
右の方に跳ね出して遊んでいる白いアンスリウムは彼女の弟たちだろうか。

花を選び、花器をとり出していけはじめ。別に何を考えて、どう形造ってゆこうかなどとは考えない。ただ無心になってしまっている。

いけ上がつてはじめて、「あ、こんな花になったのか」と気付く。多分心のどこかにそんな心象が潜んでいたのだろう。

小品花が好きなのは自分の心の奥底が垣間見えるからだと思う。勿論うまくゆかないときも多い。自分に失望しはするが、それはそれでいい。次は又何かいいい想いが浮かんでくる花がいけられるかもしれない。別に立派な創作的造型作品はいけてみようとも思わない。

これまでに遭遇ったいい風物や言葉、人の表情、歩いているうちに感じた空気の肌触り、別に寒暖とはかわりはない。好きな音、匂い、嫌な記憶も沢山持っているが、自分のいけた花を見て、そんなものは思い浮かべることはないのである。こんなことを書いていると随分気楽な人だと思いいなるかもしれない。たしかに気楽な人である。

だがよく考えてみれば、私は立花や生花という古典的ないけばなに惹かれてこの道に迷

いこんだのである。きっかけは先代の自然調な自由花だった。それまでに見てきた日本人の古くから大切にしてきた、そしていつくしんで育ててきた美しさが先代の心の中にも生きていてることを感じた。そしてそんないけばなに至る道を示していたのが立花や生花だったのである。

丁度西欧人が日本のいけばなのうちで最も興味を持つのが古典的な立花や生花であるのと同じような魅力を感じたのだろう。

いけばなは立花ではじめて形を持つようになった。初期の素朴な立花はだんだん植物の生態の観察が緻密になり、その知識が伝書に集約されて立花の基本的な花型が出来上がったのが江戸時代初期である。

その後立花の枝数を減らしてもその自然観は逸れないだろうとして生花がはじめられた。

生花は江戸時代後期から完成度を高め、その末期には爛熟期を迎える。

明治に入り、お茶やお花は困難な時代に入るが江戸時代に愛され磨きぬかれた邦楽も強かに生き続けている。

一一七頁の私の枯葦の立花と、左の頁の投入小品花、かなりことなつた表情だが同根異花と云えるのではないかと思う。

共に桑原専慶流というお花畠から出生したのである。



花材／デンファレ アンスリウム二種 花器／細口陶花瓶

2010年12月 テキスト 570号

仙 齋 彩 歳 2011年3月 テキスト 573号

初代富春軒仙溪が「立花時勢粧^{りっかいまようすがた}」を出版した頃、長崎出島のオランダ商館にケンペルというドイツ人医師が駐在していた。医師ではあるが植物学も修め、三年間の日本滞在中に二度も江戸に旅行して、植物学者として日本の植生や日本人の植物に対する見方、いけばなに関することも「江戸参府旅行日記」に書き記している。

「江戸参府旅行日記」を読んでまず驚いたのは大名行列である。一つの宿場を毛槍を立てた奴^{やつ}を先頭に出発し、行列は延々と続きその宿場を最後尾のお供の藩士が通り過ぎるまで三日もかかったそうである。一体何千人の行列だったのか。

徳川幕府は全国の大名の統制策として参勤交代という制度を設けていた。ご存知のように大名達は一年おきに領地から江戸に出府させられていた。

大大名だと多分何千人もお供を連れての行列である。

贅沢な旅行のことを大名旅行というけれども、当時の大名行列は現代の大名旅行とは桁が違うらしい。そんな大がかりな旅の出費を二百何十年か続けさせ、それを大名達も受け入れてきたのである。

だが、そのため道路は整備され、治安もゆきとどいていた。そして京都から江戸までは十二日間。長崎から江戸までだと十七日間と旅程まで決められていたそうである。おまけに奥方達は江戸に人質のように強制的に住ま

わせられていた。

街道が整備され、治安もよかったので江戸時代人は大変な旅行好きであつたらしい。こんな話も書かれている。十三、四才の子供が福島県あたりから一人で伊勢神宮への参拝旅行をしているのに出合つたというのである。

良かっただろうなと思うのは下関から大坂迄の瀬戸内海の船旅である。

日本の人口は初期は二千万人に満たないが元禄時代には三千万人台になる。船上から見る中国地方、四国の風景は質素だが美しい平屋の村、背後は美しい山地。こんな美しい海路は世界中どこにもないといはれている。

京都から江戸までの途中、通り過ぎた町や村の戸数やおよその人口まで記している。特に村や町のお寺や神社のことには興味を持っていたらしい。どのお寺にはこんな仏像が安置されており、神社の鳥居の大きさや参道の造り。御神体は鏡や剣であつたりと見聞を楽しく記している。

旅の途中乞食が多かつたと、そして乞食の種類も様々あつたのだそうである。今ではホームレスは見かけるが乞食は殆ど見ない。

私の子供の頃にはお寺の参道や繁華街の道端には必ず居た。だが三百年以上昔の街道筋には大勢居たそうで、旅行者にしつこくつきまとつてケンペルも困つたと書いている。

流祖富春軒の暮らした十七世紀末の日本をあらためて知った。



花材／葉牡丹 ガーベラ二色

花器／銀製ワインクーラー

この原稿を書きはじめた日、東北関東に大地震が起こり、大津波が押しよせた。

「災害」。

小学校一年の六月、神戸を室戸台風が襲った。海岸近くに建っていたソコニーという石油会社は風でつぶれてペシャンコになっていたし、木造の校舎が潰れて児童が下敷きになってしまったりした。

五年生のときには大水害があった。大水と土石流。長雨のため六甲山からものすごい勢いで押し流されてきた土砂。南北の通りは激流。道に張ったロープを伝って消防団の人が下校する私達をかかえて渡してくれた。友達の祖母が一週間ぐらいあどで埋まった家の残骸から掘り出されるのを見た。

中学校四年生では神戸も大空襲にあった。私は海軍にいたので家、そして街の焼きつくされるのを見なかったが、復員してきたら家の焼け跡には父のゴルフのクラブの曲がったのと、鉄の五右衛門風呂だけが残っていた。一九四五年のこと。

そのため京都に引越してきた。父が亡くなった後、東福寺山内の広い家で一人で暮らしていた母は「もうこんなに手のかかる広い家に住んでるのは嫌。」と言って神戸に移った。

そして十五年ほど前の神戸淡路大地震。私と家元が西宮北口から歩いて神戸の母の

家まで様子を見に行った。途中芦屋のあたりで、京都の駅弁屋の萩の屋が折詰め弁当を配っていたのを頂いた。あの有難みは忘れられない。災害地の広い国道は通れたが六角通や室町通くらいの幅の道路は両側から倒れかかった家にふさがれて通れなかった。

そんな市街もいつの間にか復興した。

関東大震災の頃は私の生まれる前の出来事、まして江戸時代の大災害は歴史上の大事件である。

だが今度の地震と津波はその刻々の惨状がテレビで報道された。地震で土台のゆるんだ家が寄せてくる津波に押し流され、退いて行く津波に引きつられて海に落ちてゆく光景。ああ怖いと思うだけでテレビの前で坐り続けているだけだった。

被災地は東北地方から関東の北部まで六〇〇^キにも及んでいる。大阪から東京までの距離。新幹線で東京まで行くとしたら、その走り続ける車窓の右側全部が津波にさらわれた街並みになっているのである。被災地はこの後どうなるのだろう。

日本も度々の天災、空襲や火災などの人災に何度も見舞われてきたが、力強く立ち直ってきている。そんな歴史しか思いつかない。



花材／紫陽花 薔薇二種 花器／濃紺八角陶鉢

相変わらず毎夜の読書は長く、面白い本が見つかる。と明け方まで読んでしまう。それでは明るる日にさしつかえるので此頃は一時になつたら睡眠導入剤をのむようにしている。

最近読んだ本で面白かったのは「中国の科学と文明」。

原著はジョセフ・ニーダムというケンブリッジ大学の先生である。

その膨大(二〇〇八年に二十四刷目が出版されている)な著作の出版は現在も続いているようである。その著作を要約したのはアメリカの歴史学者のロバート・テンプルという人である。

「中国の科学と文明」という大著の序文に「古代および中世の中国の並はずれた創意工夫と、自然に対する洞察力」は私達が暮らす現代世界に大きな恩恵を与えていると書いている。

実際近代農業、近代的造船、石油産業、天文学、音楽学、十進法、紙幣、傘、釣り竿のリール、一輪式手押車、多段ロケット、銃、水雷、毒ガス、落下傘、熱気球、有人飛行、ブレンダーやウイスキー(蒸留酒)、将棋、印刷術、蒸気機関の基本構造までことごとく中国に由来するものだそうである。

火薬や羅針盤、更に複数のマストによる帆走技術が中国から入ってこなかったらヨ-

ロッパ人の大航海によるアメリカ大陸の発見もなかったし植民地帝国を作れなかった筈だと言ふ。

農業に関しては、鉄製の犁(すき)を牛に引かせて農作しはじめたのは中国人で、それよりも早く紀元前六世紀には畝(うね)で作物を栽培を始めているが、ヨーロッパでは十八世紀になつてようやく普及するようになった。中国より二千二百年もおくれていたそうである。

興味深かったのは、太陽の黒点の発見と観測である。紀元前四世紀の甘徳と石申と巫咸という人の作った大星表に記されている。ヨーロッパ人は太陽は神の作り賜うた完全無欠なものであり、その表面に黒点などできよう筈がないと思っていたのだが、現代では中学一年生でも太陽の黒点とは何かを知っている。黒点は水星や金星が太陽面を通過するときに現れるものだと考えていたのである。

太陽の黒点は地球上の気温にも関係するということをは何かの本で読んだことがある。黒点が多い年は僅かに気温があがり豊作になるらしい。豊作も凶作も皇帝の責任だと思われていた中国。皇帝も天体の状況は必死になつて観測させたのだろう。だから実際的な天文学も早くから発達したのではないだろうかと思ふ。



花材／斑入り八角蓮 オンシジューム二色 花器／中東産細口花瓶

2005年6月 テキスト 504号

縄文時代早期、というところから八千年ほど前の日本列島の人口は二万人ぐらいだそうである。

弥生時代になって六十万人弱。奈良時代四百五十万、平安時代末期で四百八十万。一千万人をこえるのは徳川時代に近くなってきたことである。初代富春軒が「立花時勢粧」を出版した頃には日本の人口は三千万人をこえるようになる。それは庶民の人口が大きく比率を高めてゆくということでもあると思う。

ということは文化の上でも庶民を対象にしたものが占める割合が高くなるのである。

平安時代というのは日本人の美意識が研ぎ澄まされた時代ではあるが、その文化を享受したのは宮廷の周囲のごく一部で、平安末期の人口約七百万人のうちの-%にも満たない人々だけだったと考えられる。識字率はお話にならないくらい低かっただろうし、ある歴史家は平安時代の宮廷人の言葉は京の都に住む庶民には通じただろうが都を少し離れただけで通じなかった筈だとも云っている。実際私が学生時代、九州の山奥へ行ったとき、山村の老人と話した

が何を云ってるのかさっぱりわからなかったし、私の云ってることも通じなかった。

日本の文化は地域差で通じたり通じなかったりしていたようである。言葉が通じない以上、すべての日本人が共通の価値観はあり得なかったのではないだろうか。平安時代の宮廷人と地方の庶民とは全く違った人種だったと云えそうである。

日本人が共通する、或いは共有できる文化がではじめるのは江戸時代初期以後、人口が平安時代末期の五倍ぐらいにふえてからのことではないだろうか。芸能や娯楽の面で庶民の要求にこたえられるようになってゆく。音楽の面では三味線が普及し、浮世絵が大量に生まれ、読み本も次々と出版されるようになり芝居小屋も地方にまでできてゆく。音楽と云えば笛と太鼓ぐらい、今でもお祭楽器の主役は笛と太鼓である。

いけばなも室町時代の立花にはじまったとは云うものの、精緻な出生の姿を捉えることができるようになったのは実際に植物を栽培し、その姿を見つめ続けた庶民のお陰である。元禄時代前後からいけばなの歴史は本当に面白くなる。



花材／アリウム・ギガンテウム トルコ桔梗 花器／濃紺釉深鉢

2007年7月 テキスト 529号

廊下の段差を踏み外して腰の辺りの骨を三ヶ所折って入院している。

銀閣寺の北、比叡山の麓で大変環境がいい。部屋の窓の外には檜の太木が生い繁っているので天気の良い日はベッドの白いシーツが淡緑色に見える。

三週間ほどの入院の予定だったので沢山本を持ちこんだのだが、のんびりしすぎる環境なので却って集中できない。今までに何度も読んだ本を持ってきて読み返しているが、一体何を読んでいたのか、細かいことは十分の一も覚えていない。

多分それでいいのだと思う。以前にもこの欄で書いたが、一冊の本の百分の一でも自分の頭に残ればそれでいいのである。そう考えていれば難しい本でも気楽に読めるし、一冊の本を読んでも、その百分の一しか身につかないなら百冊読めば一冊分の知識がたまる筈だとくらいにしか思っていない。

読書は楽しいのである。難解とされている哲学書でも気楽な気分で読めば、云おうとしていることは感じとれる。ヘー

ゲルもカントも随分思考を重ねた上で書いているが、その感じとったことを言葉にして人に伝えることは至難の技だった筈である。西欧の哲学者は禅宗の坊さんのように悟ったことを簡単な語句で表現できないのである。「我疑う故に我在り」などという至言も、素直に受けとれば、ただそれだけでいいものを千頁も費やして説明しなければならぬのである。人にわからせるためには独自の造語も出てくる。そんな言葉を翻訳しようと無理して作った日本語で西洋哲学を学習させられるのは迷惑な話である。

私は自分の五感と、自分が考えることで世界、或いは宇宙を感じとりたいのである。人間、誰でも自分の頭で考えつめれば答が何となくわかるはずなのである。そうして得た答なら自分の気分も安心してついてくるものなのである。別に自分の気持ちをコントロールしようとするわけではない。勝手にそうなってしまうのである。気楽なものである。



花材／蔓薔薇 白根葵二種 花器／焼締陶花瓶

2009年6月 テキスト 552号

仙齋彩歳

2011年8月 テキスト
578号

退院して一週間。実は家の中の段差でひっくりかえって骨盤に痺が入り、あたりの小骨が二本折れたのだそうである。

丁度一月ほど入院してたのだが、銀閣寺の北の東山の麓、とても環境のいい病院で御機嫌な三十数日だった。退院のとき、看護師さん達に「入院中とても楽しかった。」と御礼を云いに行ったら「楽しかったなんて云う人初めて!。」と大笑いされた。多分そうなのだろう。

ところで、どうせ寝転がっているだけなので思っただけ最近興味のある本を二十冊ほど持って行った。色んな本を読んではいいるが、まとまった知識として頭の中できちんと整理できていないので大事だと思ふことをノートにとってみようと思ったのだが、環境がよすぎてちっともまとまらない。

昔中学校の頃、何かの本で読んだのだが、書齋というのは静かで自分の理想とするような良い環境を作るとかえってよくないと書いてあった。電車の中なんかの方がかえってよく吸収できるそうである。私の書齋も中々環境はいい。でも孫共の騒ぐ声や

櫻子の大きな声、料理の匂い、電話のベルの音も避けようもなく入ってくる。でもそれが程良い環境らしいのである。

書齋に聞こえる音で好きなのは、雨の音。いつかも書いたが梅雨の頃静かに降ってはいても屋根から雨樋に流れてゆく音はいいものである。

夜半書齋で本を読んでいる頃、聴くともなく聞こえてくる。「あ、やっぱり降り出したな」と気付く。動物でいうなら犬の吠え声ではなく、おとなしく、そっと啼く猫の声かもしれない。

書齋にこもって、障子を閉めていても様々な季節の音が入ってくる。雨の音を聞いて「あ、清滝はどれくらい勢いで流れているかな。」と出かけてみたくなったり、雨があがって日がさしてくると東山の山間をあがってゆく雲を見に行ったりする。

そんな日を送っているので梅雨時楽しく過ごしている。花だけが季節の楽しみではないのである。お得な人、と云えるようである。



花材／山紫陽花「紅」 桔梗 矢筈薄 花器／染付八角細口瓶

少し以前、人の好みということについて少しでも書きかけたことがあった。よく考えてみると「好み」の根源、理由はよくわからない。ただAとBがあつたとするAが好きだというだけで、それ以上はさかのぼれない。ただAが好きだというだけしか云えない。

私は物心ついた時からビーフステーキが大好きなのだが、「何故好きなのか?」と聞かれて、よく考えてみても「好きなのですから好きなのです。」と答えることができない。それは言葉で説明できない論理以前の問題なのだろう。

心の真底深くで「好み」は私達の気持ちを支配しているのだが何かを選択する場合、その選択がよく洗練されるか否かによって、そしてそれは継続されることによって良くなつてゆく。

私は皆さんに時々「よくないいけばなを見たら、それと同じことは自分はいかなように。いいなと感じる花を見習って自分もそうしようと思つても、そのいいいけばなは、長年かけて自分の良さを作

り上げてきたいけばなだから、そう簡単に自分に応用できるものではない。それより自分のいけばなの良くないところを洗い落とすのが上達しやすい。」と云っている。

それが洗練の一つの方法でもある。私が先代(十三世)に敬服していた点の一つは、自分のいけた花の良くないところを、どんなに疲れていても、どんなにおそくなつても根気よく手直ししていたことである。これが潔癖さであり、自分のいけばなの汚れを洗練させてゆく努力でもある。

個性という言葉がある。個性は洗練して余分なものを洗い流し、こそげとつて最後に残った芯のようなものだと考えている。洗練しなければそれは唯の性癖にすぎない。私自身も余計な垢が分厚くつもっていたし今もこびりついてとれてない部分もある。だがいけばなの稽古を重ねるうちに随分うすくなって、人にも私自身の姿が見えるようになってきたのではないかと思う。



花材／朝日葉蘭 花器／煤竹寸筒

「桑原専慶流展」を終えて、半月。皆様
が盛況に導いて下さったことに改めて御礼
申し上げます。

私が始めて主催した流展は一九七三年
の「桑原専慶流大阪展」。会場は大阪・中
之島の朝日ビル八階の大ホール。先代もテ
キストに桑原隆吉・素子主催として掲載し
てくれている。

このいけばな展で私と素子がどんないけ
ばな展がしたいのかというのがお互いにわ
かり合えた。そして一年おいて一九七五年
に二人の頭文字をとって「R & M」展を新
築された京都朝日会館で開いた。

二人、本当にしたいことができた初めて
のいけばな展だった。別に新しいことを
やってみようとしたのではなく、二人の好
きなふうにやってみただけのことだった。
幸い大好評だったが大赤字。

先代は「私もいけばな展がすんだら財布
は空っぽ。明日からどうしようと思つてた」
と云つてたが同じことのくり返し。

それでも、その時から何度も「R & M」展、
そして「桑原専慶流展」をやってきた。

今回の流展は前回から十年目。家元と櫻
子が主催してくれた。そして次女のはな
孫の素溪と慶寅が前後期を通じて出品して
くれた。

そして出品者の中にも三代、四代と桑原
専慶流のいけばなを習つて下さっている方
も多かった。

私としてはこんな幸せなことはない。現
代の世の中でこんなめぐり合ひは中々得ら
れないのではないかと思う。

左の頁の赤い百合はガイミアリリー
(ジャイアントリリー)で高さは一・五^{メートル}ほ
どになる。花フジに入荷したときには固い
蕾だったが、会場では見事に満開。

とり合わせたのはチランドシア。これは
エアープランツという名前で花屋や園芸屋
でこれの小型種が売られている。名前の通
り根は退化していて、空気中の湿気を茎か
ら吸収して生きている。南アメリカ原産の
パイナップル科の植物である。小型のもの
なら時々霧吹きで水分を与えてやれば良
い。



花材／ガイミアリリー

チランドシア

枯アナナス

花器／陶花瓶

矢野祐志作

仙 齋 彩 歳 2012年1月 テキスト 583号

此頃年を経て耄碌もろろくしたように見えながら、時折ピカツとした一面を見せてくれる老賢者は滅多に居なくなつたと感じる。

耄碌という言葉もあまりつかわれないうになった。年をとつて物忘れが多くなつたり、体力もおとろえることだが老人性痴呆症というより少しはいい言葉ではないかと思う。

私は今年の誕生日がくると八十五才になるのだが、年相応の叡智はそなわっていない。少し恥ずかしいのである。

私が好きな中国の仙人、仙女達は五百才になつても見た目は二十才ぐらいにしかうつらなかつたらしい。だが心の方は五百才にふさわしい叡智をそなえていたのである。それなら若く見られてもいいのではないだろうか。

「アンチエイジング」。年齢にさからつて若さを保つという意味なのだが、一所懸命努力を重ねていると、いつの間にか心の「知」が育たなくなるのではないかと思う。六十才になりながら二十五才の心しか持っていないのならバランスの悪い人生と考

られる。

童心どうしんにかえれ、という言葉がある。ピカソはこんなことを云っている。「私は子供のような絵を描きたかつたのだが、七十になつてようやくそんな絵が描けるようになった」。人生の修練を積み重ね、そこで得た「知」を一旦捨てて自由自在な境地を得たのであろう。東洋の老賢者、或いは悟りを得た禅者の言葉のようである。ピカソの絵はあまり好きではないが、あの言葉は好きである。

今私はおとなしく満ち足りて暮らしているが、もし今でも五十才の体力を持つていたら嫌な爺さんになつているにちがいない。そしてそれは人生の旨みを取り逃がしていることでもある。

良かったことも、良くなかつたことも思い返してじつくりと味わわせて頂いているのである。

でも時々くだらないことを思いうかべて当惑してしまうこともある。

だがそれはそれでいいのである。



花材／寒桜 椿 小檀こまゆみ 榛 篋柳へら 糸菊 小菊

花器／青銅立花瓶

去年は五月にひっくり返って骨盤が割れて四十日。七月には胃がおかしくなつて十日ほど。暮れには両足が痺れて又々十日間の入院。

巡り合わせの悪い年だと思いいになるかもしれないが、目先の変つた環境で何日間も暮らすのもいいものである。

じっくり本も読めたし退屈せずに過ごしてきた。流内の皆さんや家族には難儀なジイサンやなご心配をおかけしたことをお詫び申し上げたい。だが本人の私は明るい顔をして過ごしてきたのである。

いつの間にか二月になつてしまった。如月・衣更着と書く陰暦二月の異名だが實際の町屋の造りは、たしか徒然草の一節だったと思うが「家の造りは夏を旨とすべし」という。とくに通り庭の台所は天井がなく吹き抜けで、あんな寒い所でよく働いたものだと思う。

老人は真綿を背中に入れて煮炊きしていたし、暖房は火鉢の炭だけだった。田舎の囲炉裏端での冬の方がずっとよさそう

である。

戦前神戸で暮らしていたので冬はガスストーブで快適な冬だったので京都の町屋暮らしの冬は我慢できそうになかった。

結婚してから六角の家とは別にマンション暮らしをしていたので、この家で暮らすようになってからかなり改装して冬を過ごせるようにした。如月の深夜、原稿書きをしても大丈夫である。奥まった家なので烏丸通の自動車の音も殆ど入ってこない。

十二月の中旬と一月の下旬から二月一杯。京都は閑かな町になる。この場合静かと書くよりも閑かと書く方がよさそうである。寒くても北風はおだやかだし、落ち着いた一と季である。

晴れた日には御所のベンチに寝ころがるのでもいいし、散歩の途中北山から時雨てくるのを見ていたり、たまに雪が降れば出かけた所が沢山ある。

私にとって有り難い町なのである。



花材／出雲大社椿 淡紅椿 金柑 はいひかげかずら 花器／耳付陶花器 宇野仁松作

2011年1月 テキスト 571号

仙 齋 彩 歳

2012年5月 テキスト 587号

藤の花は遠目で見ても近くで見てもいいものである。

去年五月、バプテスト病院に入院してた頃、比叡山の山麓、西側の斜面に咲いていた藤、夕方西日のさす時刻になると深い緑を背景に大きく木々の幹に這い上がった太い蔓に咲いた花が、ふんわりと淡紫色と真綿をひろげたようにひろがる。

日が沈んでも花はぼんやりと暮れ残っている。

藤の名園は方々にある。三尺藤と云う花の房が一房にも伸びる品種、京都では宇治の鳳凰堂の庭の藤も有名だが、私は遠目で見る比叡山の中腹に咲く藤の花が好きなのである。

現代の私達のなれ親しんで深い愛着を感じている京都の風景も、千年或いは三千年昔の縄文時代にはどんな植物が茂っていたのだろうか。照葉樹の原木が北山から東山そして西の山裾まで生い茂っていて鹿や猪が自分たちのテリトリーとして気楽に餌をあさっていたのだらう。賀茂川や桂川も京都盆地では幾筋にも分かれて湿地が広がっていた筈である。

縄文人は鹿や猪と団栗を分け合う日々。

今、私の住んでいる烏丸六角辺りでも髭の濃い縄文の男が団栗を拾い集めていたのかもしれない。

そんなことを思い浮かべながら原稿を書いていると、ちっとも退屈しない。



花材／藤 路の葉 東南アジアの蓮の花

花器／青白磁小品花器 市川博一 作 紅褐色釉花瓶

2012年5月 テキスト 587号



著者

くわはら せんさい

桑原仙齋

1927 年生まれ。

1953 年、慶應義塾大学卒業。

1981 年、桑原専慶流第 14 世家元、桑原仙溪を襲名。

2004 年、長男に家元を継承し、桑原仙齋となる。

各華道展出品、花展主催、ドイツほか海外でのいけばな講師、NHK 出演、新聞雑誌等で活躍。

著書

「京都花ごころ味ごころ」(婦人画報社)

「花ふたり」素子夫人との共著(婦人画報社)

「花ふたり旅」 // (婦人画報社)

「源氏拾花春秋・源氏物語をいける」田辺聖子氏との共著(文英堂)

「桑原専慶流いけばなテキスト」1980 年～2012 年、撮影・執筆・編集発行(毎月)

1995 年～1997 年京都いけばな協会会長

公益財団法人日本いけばな芸術協会特別参与

2012 年 12 月 18 日永眠

せんさいさいさい
「仙齋彩歳」

2013 年 1 月 31 日 第一刷発行

編集・発行

桑原専慶流家元 桑原仙溪

〒604-8164

京都市中京区六角通烏丸西入

<http://www.kuwaharassenkei.com>

いけばな写真撮影：宇佐美宏

印刷：西湖堂印刷株式会社